

浄土十勝箋節論卷上

卷第二章目

持名最上勝

初紙

浄土十勝箋節論卷上

乾中

菩薩大乘戒比丘澄円撰

持名最上勝 第二

夫れ飛禽の高卑は是れ大鵬^{たいほう}・斥鴳^{せきあん}か、走獸の優劣は乃ち獅子・麤鼠^{けいそ}か。余善と念仏との殿最、其れ然らざらんや。所以に本疏に曰く、⁽³⁾

念仏三昧の功德超絶して、実に雑善をもって比類と為ることを得るに非ず。自余の衆行、是れ善と名づくとも雖も若し念仏に比すれば全く比較に非ず^上已。

加^{しか}之^{のみならず}、二行比対の解釈、専雜校合の詳判等、学者観つべし。

請い問うて曰く、是れ則ち、因位本誓の別行なる所以なり。

難じて曰く、一乗の妙行は是れ頓証菩提の秘要なり。四曼の密修は乃ち即心成仏の良因なり。然るに今、焉んぞ之れを^{さみ}編⁽⁴⁾して「雑

(1) 大鵬斥鴳：「大鵬」は大きな鳥、「斥鴳」は小さな鳥。

(2) 獅子麤鼠：「獅子」はライオン、「麤鼠」はねずみ。

(3) 善導『観経疏』（浄全三・四九上）。

(4) 編：軽んずること。

修維行」⁽⁵⁾と下し、これを無^なして「千時三五」⁽⁶⁾と毀するや。

答えて曰く、夫れ朝四暮三する則^とんば衆狙皆な伏して喜び、朝三暮四する則^とんば諸獼^び咸^ひな起ちて怒る。抑^お四^そ三^もも乃ち七つなり。三四も亦た七つなり。然りと雖も旦暮の差異に依りて憂喜の不同を成すのみ。之れを以て之れを觀れば、万行亦た然り。若し成仏の爲にして之れを勤むる則^とんば朝四暮三か。若し往生の爲にして之れを修する則^とんば朝三暮四か。

又た以^{おも}意^ん、船中に於て帆を張る則^とんば順風の来り扇ぐことを求むと雖も、金谷の花の本には苦^{ねんじ}ろに之れを嫌う。夏天⁽⁸⁾に於て雨を欣う則^とんば黒雲の聳覆うことを喜ぶと雖も、南楼⁽⁹⁾の月の前には甚だ之れを厭う。入聖得果の船中には万行の順風を賞し、他力往生の花の本には衆善の暴風を厭う。孰れの智人か爾らずと云わんや。然れば則ち、行者等謂うこと莫れ、行体惟れ同じきが故に、功德全く齊しと。

古に云く、

梁麗⁽¹⁰⁾以て鼠の穴を塞ぐべからず。騶^{りゅう}犛^{うり}以て鼯鼠⁽¹¹⁾を捕えるべ

(5) 法然『選択集』（昭法全三二〇）。

(6) 善導『往生礼讃』（浄全四・三五六下）。

(7) 獼：猿のこと。

(8) 夏天：夏の空。

(9) 南楼：秋のこと。

(10) 梁麗：梁も麗も屋根の棟木のこと。莊子の秋水の故事に基づく。底本頭注に麗の字は塵の誤字かとの指摘があるが、出典が確認ができたため、ままとした。

(11) 騶犛：「騶」は栗毛の馬、「犛」は固い毛の牛。

からず。牛を涵^にるの鼎以て鶏を烹^にるべからず。鼠を捕るの猫、獸を搏^はかしむべからず。一鈞の器には容るるに江漢の流を以てすること能わず。百石の車には満つるに斗^と筩^{しょう}の粟を以てすべからず。

とは蓋し此の謂いか。此の義は是れ三部經の所説、浄土宗の良談なり。智人応に思察すべし。

問うて曰く、持名の一行、諸余の万善に卓犖^{たくらく}すとは一切の事に於て然りや。將た又た、綽^{こと}に依りて其の益に厚薄の異り有りや、何如。答えて曰く、此れに二義あり。一つに曰く、当に順前句答すべし。『楞嚴』一箇の問答、学者、之れを觀つべし。二つに曰く、応に順後句答すべし。古に云く、

万葉互いに君臣為り。諸根更るがわる王侯為り。皆な臣妾為ること有るか。其れ臣妾は以て相い治むるに足らざるか。其れ遞^{たが}いに相い君臣為るか、と。

之れを以て之れを觀れば、若し入聖得果の為にする則んば円密は是れ君か。念仏は是れ臣か。若し即詣西方の為にする則んば万

- (12) 斗筩：「斗」は一斗を入れるマス、「筩」は一斗二升を入れる竹器を指す。俸禄が少ないことや器量の小さいことも意味し、転じて取るに足らないことをいう。
- (13) 卓犖：この上なく優れているさま。

は是れ臣か。持名は是れ君か。然れば則ち、二行更互いに等勝劣の三義有り。密教四重の秘積、合して自ら知れ。

請い問うて曰く、所用不同なるが故に。願非の差殊あるが故に。

問うて曰く、夫れ南英北俊等、宗義を建立する則んば我が仏の己行を以て他仏他経の上に置き、他仏他経を以て我仏己行の下に安んじて以て宗旨を立てて勝負を判ず。然るに今言う所を聞けば、諸仏万行互いに三義を具して、斉等にして異なること無しと。若し爾らば、宗義建立門、更に成立せざる者か、如何。

答えて曰く、此の難、朱愚なり。夫れ総じて群典の説相を明らめ、諸仏の徳能を案ずるに、迭いに三義を賅えて闕減有ること無し。然るに吾が牟尼如去、仏仏経経に於て各一箇の宗旨を立てたまえることは、此の勝れたる辺を取りて、以て彼の劣なる処に對して且く一仏一経の宗法を弁立したまえる者なり。此の義、互いに諸経に融通して全く偏局無し。然れば則ち、竜猛大士の四依の薩埵為りしも、『法華経』の「我所説諸経、法華最第一」〔決了声聞法、是諸経之王〕の明文を知ると雖も、亦た『智論』を造

(14) 南英北俊：南都北嶺のすぐれた学僧たちのこと。

(15) 底本には「己」の横に「コ」とふりがながあるため「己」とした。

(16) 前注にならない「己」とした。

(17) 朱愚：浅はかで愚かなこと。

(18) 竜猛大士：密教の祖とされ真言宗では真言八祖の一人。龍樹と同じ視されているが、六世紀ごろの別人との説もある。ここでは『大智度論』を作った龍樹と同じにあつたっている。

(19) 四依薩埵：四依菩薩のこと。階位の分類には多くの異説がある。

(20) 『法華経』（正蔵九・三二中）。

(21) 『法華経』（正蔵九・三二上）。

りて般若を釈せしときは、『般若経』の「般若第一教、此経結縁者、雖有重業障、必当得解脱」の金言に依りて、以て『般若』と『法華』とを批判して、『法華』を以て以て卑劣と為し、『般若』を以て以て上勝と為す。是れ則ち、互いに勝劣有るの意なり。智人省察せよ。

又た『編年通論』の第一に云く、

昔、齊人船に乗りて江を渡る。其の父水に墮つ。其の子臂を攘げ頭を摔ち顛倒して水を口従り出ださしめて、父の命甦ることを得たり。夫れ頭を摔ち顛倒するは不孝の莫大なり。然れども以て父の身を全うす。若し手を拱いて孝子の常を修めば、父の命、水に絶えなん。孔子曰く、「与に道に適くべし、未だ与に権るべからず。所謂る時宜く施すべきものなり」^上。已。於、外儒の慮り、短きすら猶お以て此の如し。内士の懐い長せる、豈に局分すべけんや。大凡そ当代の庸輩等、多く宗建の様に迷うて、頻りに従上の難を致す。是れ尤も庸愚なり。智人と名づけけし。

(22) 典拠不明。ただし『宝物集』「十二門開示第五発願」の最後に閻魔王の授けた文として引用あり。山田昭全他編『宝物集』(おうふう、一九九五)一五七頁。

(23) 『編年通論』(正統蔵七五・一一三上)。

問うて曰く、如来立宗の様、如何。

答えて曰く、華嚴宗の意は厚植善根の大事を化するを以て正と為し、声聞縁覺の疲夫を導くを以て傍と為す。故に華嚴を以て称法の本教と高ぶり、法華を以て逐機の末教と下す。又天台宗の意は二乘闡提を慰諭するを以て正と為し、菩薩好人を教化するを以て傍と為す。故に方広・華嚴を以て別教と為し、法華・涅槃を以て円教と為るなり。又真言宗の如きは一心の利刀をもてあそぶを以て之れを賤しんで顕宗と為し、三密の金剛を揮するを以て之れを貴びて密宗と為す。是れ則ち自勝の辺を取り、他劣の処に対して以て宗旨を建立するの意なり自余準。知せよ。

今此の浄土宗の意は他力本願念仏一行を以て最上最勝と為す。自力非願の万行余善を以て最下最劣と為し、以て念仏宗を建立す空也、永觀等稱し。て念仏宗と号す。是れ則ち本誓を以て勝と為し、非願を以て劣と為るの意なり。一經一宗の義、正しく玄門に出でたり。学者自ら知れ。

問うて曰く、念仏三昧勤修の人に於て何なる勝徳有るや。又た聖道及おびよ雑修を執して浄土及おびよ名号を取らざるの人に於て、

何なる過失有るや。

答えて曰く、夫れ念仏三昧とは大覚義宗の要旨なり。故に三世諸仏、此の道を行じて已に無累解脱の玉台に登り、十方の索多、茲の門に入りて威な住・行・向・地の高科に至る。是れ即ち兆載永却の万善、恒沙塵数の法門、六字の中に撰在するに由りて而も爾り。靖邁法師の『薬師経』の疏に云く、

謂く、薬師如来の名号功德は是れ無分別智、如を証して以て成ずるが故に。言は此れは是れ諸仏甚深の所行にして信解すべきこと難し⁽²⁴⁾と。

彼れ已に爾り、此れ亦た然らん。若し信男信女有りて纔⁽²⁵⁾に一遍を唱念する者は、則ち八万塵勞の迷軍は党を卒して帰降し、百二十煩惱の逆賊は伴を引き起走す。四重八重の群山は風に随て飄去し、三障五障の衆海は波に应じて銷滅す。茲れに繇⁽²⁶⁾りて流転生死の業縛は解脱を刹那に証し、沈淪苦海の牽因は破壊を須臾に成ず。加以、四相有為の妄風は厭わざるに自ら滅し、一代半滿の法財は求めざるに忽ち之れを得たり。大凡そ六字尊号

(24) 靖邁法師：生没年不詳。唐代の訳経家。梓潼（四川省）の人。玄奘が訳経事業をはじめたとき、証義大徳一人の一人に選ばれた。

(25) 『薬師経疏』（正蔵八五・三三三上）。

(26) 八万塵勞：八万四千の法門に対する煩惱のこと。

(27) 百二十煩惱：唯識宗では見惑を一一、修惑を一六と数え、合わせて一二八の根本煩惱を説く。

(28) 四重八重：比丘戒の中の四波羅夷と比丘尼戒の中の八波羅夷のこと。

(29) 三障五障：三障とは業障・煩惱障・報障（異熟障）のこと。聖道や善根の起るのを妨げる三種の重大な障害をいう。五障とは女人が梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏の五つになることができない障害をいう。

(30) 四相有為：生・住・異・滅という消滅変化するものの四つのがた。

(31) 一代半滿：釈迦一代の教えを判じて、半字教（小乗）と満字教（大乘）としたもの。

の功用測り難し。所以に一代の教主も格量に泥なまんで只だ難可信の必要と讃じ、十方の善逝も校合に滞りて直に叵思議の大法と称す。寔まことに四記の答(32)の能く記する所に非ず。亦た三支の量(33)の能く測る所に弗ざる者なり。若し爾らば小子、豈に啞羊(34)の訥言(35)を以て其の功力の哥羅分(36)をも説くことを得んや。嗚呼、六字の尊号は此れ火鑪(37)か、五逆の大罪は乃ち銅鉄か。火鑪の内の銅鉄、豈に鎔けざらんや。名号の前の巨罪、焉ぞ消え弗らんや。以おもみるに若し南謨(38)の神丹を得ずんば、奚に繇りて西方の大仙と成らんや。今生死の水夕に在りて、已に嘉号の船筏を得たり。到岸の期、近在り。行人尤も欣慶すべし。又た二六の妄情は皆な死生の桔槔(39)、五住の結使は悉く夏台(40)の繫縛なり。桔槔は多重無量なりと雖も尊号の利刃、能く之れを断つ者なり。設きい鼻惡破鏡(41)の彙なりと雖も、必ず迦陵法音(42)の轉さえずりを聞くことは唯だ是れ本盟持名の

(32) 四記之答：他の問に対して答える四種の方法。①一向記(決定答)は直ちに肯定する法、②分別記(解義答)は問意を分別し

て答える法、③反問記は反問して問意を確かめて答える法、④捨置記(置答)は答えるに足らない問に黙して答えない法。

(33) 仏教論理学における論式の三つの部分。主張(示)・理由(因)・実例(喩)の三つをいう。

(34) 啞羊：大馬鹿な者を譬えて云う。

(35) 訥言：ことばのたくみでないこと。口が重いこと。

(36) 哥羅分：極めて小さな数量のこと。

(37) 火鑪：古式の製鉄場のこと。

(38) 南謨：南無と同義。

(39) 二六妄情：十二因縁のこと。

(40) 桔槔：手かせと足かせのことで自由を束縛するもの

(41) 五住之結使：衆生の三界の生死に住著する五種類の煩惱のこと。①三界の見惑である見一処住地惑、②欲界の思惑である欲愛住地惑、③色界の思惑である色愛住地惑、④無色界の思惑である有愛住地惑、⑤三界の無明なる無明住地惑。

(42) 夏台：牢獄のこと。

(43) 鼻惡破鏡：非常に相性が悪く他者と相容れないこと。

一行のみ。若し爾らば、誰の道人が之れを珍敬せ弗らんや。孰れの学者が之れを尊重せざらんや。

問うて曰く、何等の義有れば弥陀の名号を持念するの人、従上の勝益を獲得するや。

答えて曰く、尊号一行の中、無量無辺の大功德を具足するに由りて爾り。且く契門三千の頭角、基公尊者、⁽⁴⁵⁾此の義を詳にして曰く、「諸仏願行、成斯果名、但能念号、具包衆徳、故成大善、不麁往生云⁽⁴⁶⁾」と。

叡岳三千の之首、信公大師⁽⁴⁷⁾同じく上の義を詳にして曰く、⁽⁴⁸⁾

因行果徳と、自利と利人と、内証と外用と、依正二報と、十方一切諸仏功德、胎金両部諸尊聖衆、一代半満大小衆典、恒沙塵数無辺法門、皆悉く六字の中に摂在す。是の故に称名するものは、功德無尽なり云⁽⁴⁹⁾と。

此等の義有るが故に、称念の人能く無上の大利を得るのみ。抑又た、⁽⁵⁰⁾顕宗には南無阿弥陀仏と曰い、密家には

オンアマミリタテイセイイカラウン
なまのあみりたていせいいからうん
と云う。六九殊なりと雖も其義は全く同じ。

(44) 契門：玄奘三蔵の門下のこと。

(45) 基公尊者：玄奘三蔵の門下である慈恩大師・基（六三二―六八二）のこと。『成唯識論』の翻訳に加わり、その注疏を記したことで唯識思想を大成した。唯識宗（法相宗）の初祖とされる。『西方要決』や『阿弥陀経』の注疏もあつたとされるが、基は弥勒信仰者であり西方往生の批判者であつたことから、現在それらの著作は偽撰とみられている。

(46) 伝基『西方要決』（正蔵四七・一〇七中）。

(47) 信公大師：恵心僧都源信（九四二―一〇一七）のこと。

(48) 源信『念仏略記』（日仏全三二・二五九）。ただし内容に異同がある。

(49) 顕宗：密教以外の諸宗派の教えのこと。

(50) 密家：密教のこと。

に。四つには作念の義、十念の衆生迎えるが故に。五つには作定の義、妙觀察智の三摩地定に入るが故に。六つには作願の義、六八の大願を発すが故に。最後の一字は四字合成す**アカウマ**なり。摧破の義、仏法の怨家を破するが故に。能生の義、能く無量真如を生ずるが故に。恐怖の義、天魔外道を恐れしむるが故に。『**ク**字義』の積、具さなり。之れを用ゆべし乃至。広説。

又た云く、⁽⁵⁵⁾

ア字は是れ行の義、本不生なり。傍らの二点は是れ淨除の義、能く四魔及び一切の苦を降伏す。広く積すること下の如し。地の万物を生ずるが如し。**イ**字の大地の六度の万行を出生することも亦復た是の如し。地とは堅固の義なり。大菩提心は堅固不退にして、必ず万徳果を結す。至乃**イ**字は金剛部の阿闍カキトなり、肝の蔵眼識を主る。謂所る**イ**字は、即ち是れ大日如来の理法身、自性清淨畢竟本不生不可得空なり。大悲地輪の種子、金剛部の曼荼羅なり。至乃山嶋大地は**イ**字従り出生す。纒

(54) 妙觀察智：阿弥陀如来の悟りの智慧を指す。妙に衆生の機類を観察して説法し、行者の疑惑を断除する智慧を意味する。

(55) 覺鑿『五輪九字明秘密積』（正蔵七九二二中～二〇上、『興教大師全集』一一二九～一一六六）。

かに此の門に入れば、則ち三大僧祇を一念の^ミ字に越え、無量の福智を三密の金剛に具す。^乃至^ミ字門は、此の字二合なり。謂く^マ字に^キ字を加う。染不可得の義なり。或いは神通不可得の字、之れより出づ。^ミ字は、化身の義なり。神通變化の義、化身の義、近きが故に此の義を以て勝と為す。又た^キ字は、是れ一切諸法本性清浄にして染浄を遠離する義なり。又た三昧の義なり。妙觀察智蓮華三昧なり。第四^タ字門は、一切諸法如不可得の故に。『中論』に云く、「涅槃の實際と及び世間の際と、是の如きの二際は、毫釐差別無し」と。差別無きを以ての故に一切諸法怨対無し。怨対無きが故に執持無し。執持無きが故に如如解脱無し^上已。

又た云く、⁽⁵⁶⁾

問う此の陀羅尼の句義何れか知らん。大梵本の句義に曰く、

^オン 三身の義、成正覚の義、
供養の義、歸命の義なり。

^アミ^リト^ト ^イ 甘露、相統、寿命、
不老不死等の義。

^アミ^リト^ト ^バ ^ベ ^イ 宝座、坐御、
安樂、安座。

(56) 梵字は原典『五輪九字明秘密釈』（正藏七九）のものによった。

(57) 陀羅尼：阿弥陀如来根本陀羅尼を指す。ただし引用されているのは後半部分である。

アミリタサンバベイ 従生、往生、来迎、引接等の義。

アミリタケルベイ 庫藏、虚空藏、地藏、金剛藏。

アミリタシツテイ 成就、散去、成果、成因。

アミリタテイセイ 威徳、威勢、威光、威猛。

アミリタクビキリテイ 極楽、安養、安楽、涅槃。

アミリタビキリンタ 但受諸樂、故名極樂。

アミリタキヤナウキチキヤレイ 苦界、正念安住。

アミリタトンドピソワレイ 等虚空、無障礙、無对礙、即得往生。

アミリタキヤナウキチキヤレイ 好声音、説妙法、好音楽、自受法樂。

サルバアラタサダナイ 一切成就、満足、充樂三昧。

サバキヤラマキレイシヤキヤヨウキヤレイ 作業周遍、珍処生護、生情養、育出生嘉会、至時等の義なり。

ソツカ 有縁淨信行者に於て来迎の願を成就して、極悪の罪人に於て成就し引接す。

已上、句義の文、竟ぬ。

又た祖師上人の『初学鈔』に云く、⁽⁵⁸⁾

不空三蔵、阿弥陀の儀軌を作りて念仏往生の旨を宣べたり。

但し念仏の行相と顕宗の所談と其の意少しく異有り。又た弥

(58) 法然『浄土初学鈔』(昭法全八三三)。

(59) 阿弥陀儀軌：伝不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』のこと。

陀大小の神呪は皆な是れ句句毎に阿弥唵多の詞有り。是れ即ち句句、弥陀を唱うるの意なり。是れ密教念仏の義なり。若し阿弥唵多の句無くんば、縦い甘露の句を誦すと雖も其の驗無き者か已。

学者等、三密大教の所談を以て十八本誓の玄極を比知せよ。意みれば、鷄鳥の少識なるも猶お声に応つて来る。木神の誓い無きも亦た音に随いて響く。何に況や吾が弥陀調御に応声即現の本誓有り。豈に影を倒して降臨したまわざらんや。吾が大教典王に讚歎法子の金言有り。胡ぞ吻を動かして褒揚したまわざらんや。然れば則ち、行者等須く万縁衆務をちて六字の佳号を唱うべし。於戯天月隔てざれども濁水に現ぜず、大聖簡ばざれども感無ければ応ぜず。然るに今、持名の行者、水月の昇降を感ずること、弋の天鳥を下すにも超えたり。玄谷の応用を顕すこと、餌の淵魚を出だすにも過ぎたり。若し爾らば、誰れか持念せざる者あらんや。已上、持名妙行の靈徳を明かし竟ぬ。

抑正行を捨てて雑行を取るは、垣墻を鑿ちて蓬蒿を植うるに似

(60) 三密大教：密教の教えのこと。

(61) 調御：調御丈夫の略で、仏の十号の一つ。

(62) 大教典王：『観無量寿経』のことを指すか。

(63) 讚歎法子：『観無量寿経』上品中生に「法子。汝行大乘解第一義。是故我今來迎接汝」とあり、上品下生に「法子。汝今清淨發無上道心。我來迎汝」とあるのを指すか。

(64) 水月之昇降：法然『選択集』（昭法全三五〇）にみられる、念仏相続の行者と阿弥陀仏は親しい関係にあるというたとえ。

(65) 弋：飛ぶ鳥を捕らえるための仕掛け。

(66) 玄谷：深く暗い谷。

たり⁽⁶⁷⁾。助業を闇きて正定を修するは、短褐⁽⁶⁸⁾を悪^(く)んで金欄⁽⁶⁹⁾を愛するが如し。又た当代、南北の学者を見聞するに、浄教を学ばずして独り恣に願意を測量す。猶おし虎穴に入らずして虎の子を求むるが如し。豈に之れを得ること有らんや。然れば則ち衆賢等、皆な挙^(て)りて念仏の妙行を勤むと雖も、或いは万行随一の解了に住して之れを修し、或いは觀勝称劣の僻執に住して之れを行ず。故に求むる者千万なれども、得る者は一二ならん。静かに他人心行の相を案ずるに、其の解了乖越すること、譬^(え)えば騏驎⁽⁷⁰⁾をして千里の行を望む⁽⁷¹⁾が如く、猶おし猿猴を檻^(か)しての能を求むるに似たり。豈に果遂することを得んや。古に云く、「蟪蛄⁽⁷²⁾は大椿⁽⁷³⁾を羨まらずして欣然として自得す。斥鴳⁽⁷⁴⁾、天池を貴^(た)びずして榮願⁽⁷⁵⁾以て足んぬ」と。此れは自力修行の人の今時難証⁽⁷⁶⁾の峻隘^(けんあい)に泥滞^(でい)して、当代易往の捷徑^(しよつてい)に入らざるの謂いか。又た意みれば、資糧を貯えて曠路を過ぐるは是れ浄土の行人なり。財産に乏してを度るは乃ち自力の修者なり。空住⁽⁷⁷⁾と豊行⁽⁷⁸⁾と其の安否如何ぞや。已上、雑助を修して正定を勤めず、難行を執して易行を取らざるの失を明かし訖

(67) 鑿垣墻而植蓬蒿也……『莊子』「庚桑楚篇」に示される。垣墻は垣根、蓬蒿は取るに足らない雑草を指す。立派な垣根を取り

払って、わざわざ雑草を植えること。

(68) 短褐：裾の短い粗末な服のこと。

(69) 金欄：華美な織物のこと。

(70) 絆騏驎而望千里之行：騏驎は駿馬で、絆は両足を縛ること。足を縛った駿馬で千里を駆けようとする。

(71) 檻猿猴而求巧捷之能：檻に閉じ込めた猿に素早い動きを求めること。

(72) 郭象『莊子注』にあり。蟪蛄は蟬のこと。大椿は中国の故事における伝説の大樹で、人間における三万二千年が大椿にとつての一年にあたることされる。斥鴳は小さな鳥のこと。天池は大きな池、または海。

(73) 空住：自力修行の人のこと。

(74) 豊行：浄土の行人のこと。

ぬ。

問うて曰く、念仏修行の心行の相、其れ何如ぞや。

答えて曰く、『南華真経』に云く、⁽⁷⁵⁾

翼有るを以て飛ぶ者を聞く。未だ翼無きを以て飛ぶ者を聞かず。知有るを以て知る者を聞く。未だ知無きを以て知る者を聞かずと。

之れに準じて之れを言わば、三心の知無き者は、全く覚王の別誓を知るべからず。六字の翹無き者は、宝刹の大虚に翔くべからず。『経』に曰く、「具三心者必生彼国」と。『釈』に曰く、「十声一声定得往生」と。行者、心を留め三心を発得し、六字を持念すべし。

問うて曰く、安養往生心行の相貌、已に之れを聞きつ。但だし其の浅深厚薄の分齊、亦復た如何。

答えて曰く、夫れ六字持念の行人は、設い河水を飲んで以て美醪と思ひ、黄石を射て以て猛虎と想う心無しと雖も、若し不諂曲の心有りて内外相い感ずる者は、塵沙の罪軌を滅して金

(75) 『莊子』「人間世篇」にあり。『南華真経』は『莊子』の別名。

(76) 『観無量寿経』(浄全二・四六)。

(77) 善導『往生礼讃』(浄全四・三五四下)。

(78) 不諂曲：自分の意志を曲げず、他人に媚びへつらわないこと。

繩の浄土に詣でて、衆苦の大壑を出でて、樂邦の蓮台に坐せんこと必せり。『遊心安樂道』に云く、⁽⁸⁰⁾

罪業多しと雖も、鎖すること朝陽の暗を却くるに過ぎたり。

界趣、幽かに阻つと雖も、通ずること王印の塞を開くよりも
逾えたり⁽⁸¹⁾。

夫れ真修体顕の高位に至らずして、地住以上の靈徳を具し、禪那修行の方便を修せずして、無生法忍の大利を得。大凡そ狂酔の徒を覚まし、長眠の子を驚かすこと只だりて尊号の一法に在り。焉んぞ思議すべけん、焉んぞ思議すべけん。

問うて曰く、名号殊絶なりと雖も、猶お是れ言談の域内なり。然るに諸法は本名字無く、談話は皆な妄想なり。若し爾らば、何ぞ虚妄の名号を唱えて無生の宝国に生ずべけんや。

答えて曰く、絶言廢詮は猶お権門の闡域に属す。文字解説は正しく是れ真実の直道なり。『浄名』に云く、「言説文字は即ち是れ解脱なり。文字を離れて解脱を説くこと無し」⁽⁸⁴⁾と。又た『天王般若』に云く、「総持は文字無し。文字、総持を顕す」⁽⁸⁶⁾と。又

(79) 大壑：大きな谷、または海のこと。

(80) 伝元暁『遊心安樂道』(浄全六・六二四上)。

(81) 絶言廢詮：言語による表現を超えたところに真理の意味があらわれること。

(82) 権門闡域：方便門の教えの境地に過ぎないこと。

(83) 言説文字：言葉で説かれた法とそれを文字にしたもの。

(84) 『維摩經』(正蔵一四・五四八上)には「言説文字皆解脱相。所以者何。解脱者不内外不在両間。文字亦不内不外不在両間。是故舍利弗。無離文字説解脱也」とある。

(85) 総持：陀羅尼、真言のこと。

(86) 『勝天王般若波羅蜜經』(正蔵八七・二〇下)。

た『法華』に云く、「仏種縁に從い起こる。是の故に一乘を説く。仏慧を説かんが為の故に。今正しく是れ其の時なり」⁽⁸⁸⁾上⁽⁸⁹⁾。

又た三密大教⁽⁹⁰⁾の意は、専ら真言神呪を誦して毘盧妙覺を証得する者をや。抑恭⁽⁹¹⁾しく諸方の道人に白して言さく、夫れ三界は惡趣なり。五蘊は無常なり。九品は善処なり。三輩は常樂なり。孰れか惡趣と無常とを厭わざらんや。誰れか善処と常樂とを欣わざらんや。智人、省察せよ。智人、省察せよ。因論生論⁽⁹²⁾せん。

問うて曰く、本願の妙行は是れ口業の語声にして、意身の二業に非ず。然るに弥陀如説、自ら本願所被の根機を定むとして、八方上下無央数の塵刹世界の三学無分の一切衆生と言いたまえり。之れに依りて之れを言えば、機根は是れ十方法界の善惡の凡夫、所修は乃ち南無弥陀の六字の尊号、分明なる者なり。斯の緯⁽⁹³⁾、甚だ未審し。『大論』第七に云く、

衆生は種種因縁ありて得度不同なり。禪定得度の者有り。光明身に触れて得度する者有り。持戒、説法得度する者有り。譬えば城に多門有りて入処各各なれども、至処異ならざるが

(87) 仏種：仏となるための種子。

(88) 『法華經』（正蔵九・九中・一〇上）。

(89) 三密大教：密教の教えのこと。

(90) 妙覺：仏の不可思議絶妙な無上のさとり。

(91) 因論生論：一つの議論と関連してさらに別の問題が生じて、それについて尋ねる場合をいう。それではたずねるが、といった意で、「しからは」などと訳する。

(92) 塵刹世界：無数の国土のこと。

(93) 『大智度論』（正蔵二五・一一四中）。

如し。人の光明を身に触れて得度する者有り。若しは光明を見、若しは身に触れども、得度せざる者有りと。

又た『大論』三十四に云く、⁽⁹⁴⁾

有仏は衆生の為に法を説きて得道せしむる者あり。有仏は無量の光明を放ちたまう、衆生之れに遇うて得道する者あり。有仏は神通変化をもつて其の心を指示して得道する者あり。有仏は但だ色身を現じて得道の者あり。有仏は遍身の毛孔より衆の妙香を出でたまうに、衆生之れを聞^かいで得道する者あり。有仏は食を以て衆生に与えて得道せしむる者あり。有仏は衆生但だ念じて得道する者あり^上已。

若し之れに依りて之れを觀れば、寂寞^{じやくまく}香飯⁽⁹⁵⁾等の諸世界の一切衆生等は全く別願称名の妙行を唱念することを得べからず。何如。

答えて曰く、有人解して曰く、弥陀覺王の称名引業の本願を立てたまえることは、且く此の忍土⁽⁹⁶⁾の如くに声、仏事を作すの国土に就きて、以て本誓を立てたまいて、全く余塵得道⁽⁹⁷⁾の邦には

(94) 『大智度論』(正蔵二・五・三三下)。

(95) 寂寞香飯：ひっそりとしたものさびしい食事。

(96) 忍土：娑婆世界のこと。

(97) 余塵得道：五塵の中、声以外の四塵(色・香・味・触)を用いて得道すること。

通ぜず云。

或る人解して曰く、語業称名の義、広く身口意の三業に通巨す。

例せば、夫の青丘の太賢師、妄語戒の三業に通ずることを釈して、⁽⁹⁹⁾

經の如く「乃至見ざるを見たと言い」から「身心妄語」に至

りて、声聞の唯だ大妄語を簡ばんが為の故に「乃至」と言う。

或いは見聞等の四つの言説の中に余の三つを撰す。故に身の

妄語とは語無くして身を動ず。心の妄語とは謂く想倒等、

不見に於て見想を起こして誑して不見と言うが如く、事に称

うと雖も、所知を覆うを以て此れ即ち名づけて以て心の妄語

と為す。又た『文殊問經』出世戒品に言うが如きは、「若し

妄語心を起こさば波羅夷を犯すと曰うが如し」^上と云。^巳

有人解して曰く、密教の所談に依りて之れを言えば、夫れ念誦

とは語業称唱の義に名づく。然るに五種の念誦の中に、三摩地

念誦は是れ舌根を動ぜず、音声をも出さずして大陀羅尼を持念す

るなり。又た胸臍の中に在りて未だ語業に出でざるの声或り。若

(98) 太賢師：新羅の法相の学者。自ら青丘沙門と号して、南山の茸長寺に住し、唯識を極めた。

(99) 太賢『梵網經古述記』（正藏四〇・七〇六上）。
想倒：対象に対する誤った理解、受け取り方。

(101) 五種念誦：蓮華・金剛・三摩地・声生・光明の五種の念誦のこと。蓮華念誦とは、自己の耳に聞こえて他の人に聞こえない程度の微音で念誦すること。金剛念誦は唇齒を併せて動かさず、舌端のみ少し動かして黙誦すること。三摩地念誦とは、舌も動かさず心において真言の字相字義等を順逆に観ずること。声生念誦は心蓮華の上に商佉（法螺のこと）を案じ、その商佉より鈴を振るような妙なる音声を出すと観想して念誦すること。光明念誦は声を出す時もおさない時も常に口より光明を放って法界を照らすと念想して持誦すること。

し爾らば、彼の無言香飯等の諸世界の一切衆生の念仏往生の巨益、猶お語業に入れて以て撰せんのみ云云。

或る人解して曰く、五念皆な弥陀本願の妙行なるが故に、余塵得生の人も悉く念仏往生の本誓に乗ず。若し爾らば、従上の難勢自ら遮せられなん者か云云。

或る人解して曰く、設い余塵得道の人と雖も、猶お乘仏本願往生浄土の彙たぐいと名づくべし。所以は何ん。称名以外の万行も、亦た是れ如来因位の本願の妙行なるが故なり云云。今謂く此れ等の五義、俱に胸襟の浮詞を宣べて、未だ別願の玄旨を会せず。

先ず第一の義を挫いて曰く、夫れ吾が弥陀大士、法蔵沙門の昔、極愛一子の高位に住して、大悲闡提(101)の堅誓を発し、平等の大悲に催されて、普く一切の群類を撰したまえり。豈に選捨偏頗の局情有らんや。遅たくましく此の大道理を得たるの上に、亦た了義大乘依文判義の論説に依りて、「十方衆生乃至十念」の願文を詳らかにするに、全く能別の詞母なし。応に知るべし、周く一切六合無央数(102)の仏国土の衆生を指して、「十方衆生称我名号」と言えるこ

(102)

大悲闡提：大悲の心による誓いを立て、すべての衆生を成仏させた後に、自身が成仏しようとする事。永久に衆生救済を続けるため、自分自身は成仏できない。

六合：天地四方。

(104) (103)

無央数：数えることのできないほどの大きい数。

とを。此の義、文に在りて分明に理を得て炳焉(105)なる者なり。若し爾らば、焉ぞ慈父覺王(106)、不平局分の小願を發起して、声仏事を作すの国土を取りたまうと云わんや。若し爾(107)が言う所の如くならば、忽ちに大悲無偏の如来に不平狭劣の小心有りというになぬ。亦た平等撫育の悲母を辱はずかしむるに為んぬ。又た如来、若し五塵得脱の諸国を以て本願所被の当機と為したまわずんば、夫の寿命無量の願に「除其本願修短自在」と云い、必至補処の誓いに「除其本願自在所化」等と言うが如くに、亦た応に第十八の願に「唯除余塵得道之國」と曰うべきなり。然るに本願に既に「唯除」の言無し。末学焉ぞ局分の義を存するや。善く能く自量せよ。

次に第二・第三の兩解を沮はばんで曰く、夫れ衆生の根性万差なるが故に、六塵の得道、区に別れたり。今焉ぞ妄りに余塵得入の漢むじを以て、強いて口音解脱の類と為んや。太はなはだ自由なりと為す。

次に第四の義は、是れ三論宗の定兼(108)已講(109)に上人と名づくの所立なり。此の立義亦た過失有り。夫れ五念本願の義は、文に背き義に違するが故なり。

(105) 炳焉：あきらかなさま。

(106) 慈父覺王：慈しみ深い父。転じて仏の尊称。

(107) 定兼：(一一〇六一—一八四)。平安後期の真言宗の学僧。高野山で多に学徒を化導し、一一七九年に高野山檢校二八世となった。

次に第五の義は、九品寺覚明上人の所立なり。此の義亦た衆文に乖角し、道理に違背するが故に依用するに足らず。中に於て今第十八の一願に就きて以て論談を為すの時、第二十の願を引きて以て義勢を成ずるが故に、問答乖越して其の義更に成立せず。譬えば白鷺の色を証せんと欲して黒鷗を引き、玄鳥の体を証せんと欲して黄鸝を引くが如くに相い似たり。一笑比興、一笑比興⁽¹⁰⁹⁾。

問うて曰く、第二・第四の両義の不同、如何。

答えて曰く、第二の解は、是れ三輪の修行を皆な称名と名づく。

第四の義は、乃ち三業の所修を通じて念仏と号す。是れ其の二義の差殊のみ。

問うて曰く、称名と念仏と異語一致なり。如何が其の異を成ずるや。

答えて曰く、第二の義は、三業の所修を以て束ねて称名と名づく。第四の義は、称名は口念仏、観念は意念仏等にして、更に其の名を革むること莫し。是れ其の第二・第四の不同なり。

(108) 覚明：覚明房長西（一一八四—一二六六）。法然上人の晩年の弟子で九品寺流諸行本願義の祖。称名念仏だけではなく諸行をも本願の行として提唱した。

(109) 乖角：そむきたがう。

(110) 玄鳥：つばめのこと。

(111) 黄鸝：うぐいすのこと。離黄もうぐいすの意。

(112) 一笑比興：一つのわらいぐさとして興味があること。

(113) 三輪：身・口・意の三業の働きを転輪聖王の輪宝にたとえたもの。

問うて曰く、第四・第五の二義の不同、如何。

答えて曰く、第四は第十八の願に就きて、狭く五念本願の義を立てて以て其の義を成ず。第五は第二十の願に就きて、広く万行本願の旨を存して以て会通を致すのみ。情つら従上の五解を案ずるに、進退両難有り。然れば則ち、以て耆宿長老の妙義と名づけがた巨き者か。

問うて曰く、上来の五義、実に未だ難勢（115）の閻域（116）を出でず。論主独り何なる妙義を存するや。

答えて曰く、一箇の妙解有り。若来れ、吾れ具（117）さに語らん。夫れ六塵各別の得道は、且く其の土の大分に約して以て論ずることを為す。是れ即ち一往なり。若し小分に約して以て之れを論ぜば、傍正異なりと雖も、各各の土に皆な通じて六塵得道の者有るべし。例せば、忍土大都に約して、或いは「此土人者不仮余塵（118）」と判じ、或いは「此土耳其根利故偏用声塵（119）」と積すと雖も、亦た此れ国土に、兼て見相聞香等の得益有るが如し。所謂る『摩訶止観』第一に云く、（120）

(114) 耆宿長老：修行の経歴が長く、年老いた徳の高い者。

(115) 難勢：異義を非難する氣勢のこと。

(116) 湛然『法華文句記』（正蔵三四・二五五中）。

(117) 智顛『法華玄義』（正蔵三三・七五五中）。

(118) 智顛『摩訶止観』（正蔵四六・六中〜下）。

仏の相好を覩て発心すというは、若し如来の父母の生身を見る、身相鬲著(119)にして、明了に処を得たり。輝麗灼爍(120)として、毘首羯磨(121)も作ること能わざる所なり。転輪王に勝れて、相好纏絡(122)し、世間に希有なり。天上天下に、仏に如くは無かれ。十方世界に亦た比い無し。我れ仏を得て聖法の王に齊しく我れ衆生を度すること無数無央ならんと願ず。是れを応仏の相好を見て、上求下化する発菩提心と為す。若しは如来を見て、如来は如来無しと知り、若しは相好を見て、相好は相好に非ずと知る。如来及び相好皆な虚空の如し。空中には仏無し。況や復た相好をや。如来は如来に非ずと見る。即ち如来を見るなり。相、相に非ずと見る。即ち諸相を見るなり。我れ仏を得て、聖法の王に齊しからん。我れ衆生を度すること、無数無央ならんと願ず。是れを勝応(121)の相好を見て、上求下化する発菩提心と為す。若しは如来の身相を見て、一切現ぜざる所靡(122)し。明浄なる鏡に、衆の色像を覩るが如し。一一の相好、凡聖も其の辺を得ず。梵天も其の頂を見ず。目連も其の

(119) 鬲著：あきらかにあらわれること。

(120) 輝麗灼爍：美しく光り輝くさま。

(121) 毘首羯磨：三十三天に住し、帝釈天の命によつて建築彫刻などを司る神匠。

(122) 纏絡：天台宗では、応身仏に勝劣二身を分けるうち、すぐれた機根の者が見る仏身を勝応身という。

文広きが故に是こに載せず。知らんと欲せば之ゆいて見よ。

又た『浄名』の下に云く、山

上方の界分、四十恒河沙の仏土を過ぎて国有り。衆香と名づく。仏を香積と号す。今現に其の国に在す。香氣、十方諸仏世界の人天の香に比するに最も第一なりと為す。至乃仏の言は甚だ大なり。一切十方皆な化をして往かしめ、仏事を施作して衆生を饒益す。是こに於いて香積如来、衆香の鉢を以て香飯を盛り満てて化菩薩に与えたまう。至乃化菩薩既に鉢飯を受けて、彼の九百万の菩薩と俱に仏の威神及び維摩詰の力を承けて彼の世界に於いて忽然として現せず、須臾の間に維摩詰の舎に至る。時に維摩詰即ち九百万の獅子の座を化作す。厳好なること前の如し。諸菩薩皆な其の上に坐す。化菩薩鉢に満つる香飯を以て維摩詰に与う。飯の香普く毘耶離城及び三千大千世界に熏ず。時に毘耶離の婆羅門・居士等、是の香氣を聞きて身意快然として未曾有なりと歎ず。至乃維摩詰、舍利弗等の諸大声聞に語る、なんだち仁者、如来甘露味の飯を食すべし。

大悲の熏ずる所、以て限る意無しと。至乃 其の諸菩薩・声聞・天人、此の飯を食する者は身安快樂なり。譬えば一切樂莊嚴国の諸菩薩の如し^上已。

『浄名疏』第十に云く、「但だ勝る者に従いて正と為す。其の余は是れ傍なり」^上已。同『妙記』に云く、「此土、尚お光明を正と為る有り。何に況や余土に正しく光明を用ゆるをや」^上已。『私志記』の中に、「従正従多」^上の詳判有るは是の意なり。『玄文』第八に云く、「三塵を経と為し、六塵を経と為す」^上云吞 又た円宗の大師、^上雨華動地の時に種熟脱の巨益有りと判ず。

此れ等の経釈の現文を見るに、吾が堪忍世界に亦た余塵得道の一類有り。是れ即ち衆生の根性万差なれば、諸仏の化儀不同なるの故なり。之れに準じて彼を思うに、余土にも亦た声塵得入の一類有らんこと焉^{なん}の不可有らんや。此土は音声に仏事を作り、余国は五塵設化を為すとは、斯れは是れ、土、俗に約して以て定むることを為す。其の実は六塵に通亘す。其の異只だ是れ多少と傍正となり。若し爾らば、設い余塵得道の国なりと雖も、

(125) 智顛『維摩経略疏』（正蔵三八・六九九下）。

(126) 智円『維摩経略疏垂裕記』（正蔵三八・八四六中）には「荊溪云」として引用される。

(127) 智雲『妙経文句私志記』（出蔵二九・六四中）。

(128) 智顛『法華玄義』（正蔵三三・七七六下）。

(129) 円宗大師：智顛のことか。ただし「雨華動地」などの語句は湛然の著書にみられる。

(130) 雨華動地：天から華が雨り大地が揺るぐこと。

(131) 種熟脱：下種、調熟、得脱をいう。衆生の機根を育てて経の教えを信じられるように、心を調え、機を熟させ、解脱を得させること。

(132) 堪忍世界：娑婆世界のこと。

(133) 声塵得入：声に出す称名念仏によって悟りの境地に入ること。

(134) 五塵設化：口による称名以外を以て衆生を教化すること。

其の国土の中に若し弥陀本願有縁の一類有らば、其の土の化主、必ず当に其の人を教示して口業の尊号を唱称せしむべし。卓拔高識の大智人、知るべし。

有人、此の義を潤色して曰く、「諸仏咨嗟の本誓有るが故に。

設い余塵得道の国土と雖も、必ず持名即往の法要を説くべき者なり」云。又た解すらく、「設い余塵得道の国土に全てに声教解脱の巨益を闕くと雖も、西方浄土の一種の教行に於ては、其の教主も能く口音を以て名句文身を陳唱す。厥の徒弟も亦た耳根聴聞、語業称名すべし。所以は何ん。衆聖称揚我不作仏の別盟に召ばるるが故に、唱念我名不取正覚の別願に催さるるが故ならん」。此れは是れ其の国土の習俗を語るに非ず。只だ是れ厥の別途の一体化を言うのみ。言は、此の旨、定力願力唯識不判の別論に例して之れを知れ。又た残業延命非是通漫の詳簡に準じて之れを思え。

因みに問うて曰く、余塵得道の国土に諸行往生の人有りや。

答えて曰く、之れ有り。所謂る披読經典、持誦明妃等の口輪修行、往生浄土の義無しと雖も、諸余万行往生の彙有らんこと必

(135) 耳根聴聞語業称名…耳で聴き、言葉に出して仏の名を称えること。

(136) 衆聖称揚我不作仏…『平等覚経』誓願中の一句か。

(137) 唱念我名不取正覚…『無量寿経』第十八願の主意か。

(138) 定力願力唯識不判…『宗鏡録』（正蔵四八・七〇〇中）に、「有五力唯識不判。一定力。二通力。三借識力。四大願力。五法威徳力」とあり、唯識の道理でも判じきれない五つの力があるとされている。

(139) 残業延命非是通漫…詳細不明。

(140) 明妃…真言陀羅尼のこと。

(141) 口輪…三輪（三業）の一つで、口業のこと。

せり。然る所以は、既に見相触光、入聖得果の上悉有り。豈に觀相触光、即往安樂の中悉無からんや。故に曰うのみ。智人之れ知るべし。或いは可し。声塵得道の国の人、全く余塵を用いて下種得脱の良因と為べからず。亦た五塵得脱の国の人、更に声塵を用いて下種得脱の勝因と為べからず。但だし若し余塵得道の国土の中に、弥陀繫属の人有りて、应当に尊号を持ちて往生を得べきの類に有らば、須らく娑婆世界の音声を借りて以て、弥陀本願の名号を唱うべし。例せば夫の汎借起が三識の如し。智人知るべし。

問うて曰く、已に寂寞香飯等の一切衆生、皆な称名往生の本願に乗じて西方往生の巨益を得ということを聞く。又た毘曇性相に依りて之れを觀れば、二禪已上に尋伺無きが故に言語無し。四空処には四蘊のみ有りて色蘊無しと。若し爾らば色界十四五天、無色四空処の衆生は皆な称名往生の当機に非ざるか、如何。

答えて曰く、忍土の三界の群類皆な是れ称名往生の当機なり。但だし毘曇性相に至りては是れ小乘一途の所談にして未だ必ずし

(142) 汎借起是三識：『俱舍論記』の中では、借起を下の三識である眼・耳・身としている。

(143) 尋伺：アピダルマにおいて、不定法のうちの二つの心所のこと。尋は対象を粗く考えることで、伺は対象を微細に考察すること。

(144) 四空処：無色界にある非想非非想処・無所有処・識無辺処・空無辺処の四つの世界のこと。

(145) 色界十四五天：ここでは色界の二禪以上の天を指す。部派によって天の数が違うため、十四天・十五天を併せた表記を行う。

も衍門(146)通同の妙判にあらず。請い問う。曰く、夫れ無色有身と
言うは涅槃妙典の直説、小門一師の定判なり。矧いっわんや又た定果所変
の色無きに非ざる者ならんや。二禪已上、言語有りと言うは且く
して『法華』第一に云く、「娑婆世界主梵天王尸棄大梵光明等」(147)
と。天台大師、等の字を釈して曰く、「三四禪を等取す(148)」と。『仁
王』の上に云く、「第四禪の大静天王と作る」(149)と。『了義灯』に
云く、(150)

又た解すらく上に通ず。若し上にして下地の善業を作ること
を得ざれば、四静慮(151)の王、俱に別脱を受けたり。豈に無記
心にして戒を得と許さんや。既に善心に方に始めて戒を得と
許す。故に上地に於いて語業有るを得。多くは尋伺に由りて
いう。未だ必ずしも一切皆な尋伺を起こすにはあらず(152)。
若し爾らば、上二界の諸天等、皆な仏名を持ちて安養に詣ぜん
に何の相違か有らん。学者知るべし。

已上、一切六合の無量の衆生等、皆な六字の尊号を持ちて九品
の淨刹に詣ずることを明かし竟んぬ。

(146) 衍門：大乘のこと。

(147) 『法華經』（正蔵九・二七）。

(148) 出典不明。

(149) 『仏説仁王般若波羅蜜經』（正蔵八・八二七）。

上。

(150) 惠沼『成唯識論了義灯』（正蔵四三・六六八）。

上。

(151) 四静慮：色界の第四禪のこと。

又た問うて曰く、康存歸嚮(154)の人は無量の遍数を持ち、鶴林廻心(155)の彙は十念の仏名を唱う。此等の行者に就て、如何が引満二業(154)の相貌を勘定すべきや。

答えて曰く、若し毘曇・性相に五逆感果の相を判じて「初是引業、後(155)は満業」と言うに依りて之れを言わば、最初の(154)一称を以て、以て引業と為し、二念已去を以て、以て満業と為すべし。若し他部の論説に、引満二業の義を詳らかにして「多業引一生、一業通引満」と云うに依りて之れを論せば、最初一唱自り無後の念仏に至るまで皆な引業と成り、悉く満業と成るべし。

問うて曰く、二解の中には何を以て正と為んや。

答えて曰く、願文に甄別(157)の言莫し。故に且く論文に依りて兩解を致すのみ。其の実は知り叵し。

問うて曰く、斯の事、寔に一決し難し。但し論主の密意、其れ如何。

答えて曰く、小子が愚存は後義を以て正と為す。

問うて曰く、其の意、奈何。

(152) 康存歸嚮：常日ころから心を寄せること。
(153) 鶴林廻心：臨終の際になってから心を寄せること。

(154) 引満二業：引業と満業の二業のこと。引業とは果報の主な部分を得する業。満業とは副的な業で、貧富貴賤など差別のあるすがたの果報を引く業。

(155) 普光『俱舍論記』(正蔵四・二七七下)。
出典不明。

(157) 甄別：はっきり見分けること。

答えて曰く、是れ即ち經教解釈の文相に順ずる所以なり。如何
 が順ずとならば、弥陀の本願には「称我名号乃至十念⁽¹⁵⁹⁾」と誓い、
 釈尊の説教には「具足十念即得往生⁽¹⁶⁰⁾」と宣べ、宗師の解釈には「存
 終念仏定得往生」と判ぜり。静かに三祖俱に具足十念即得往生と
 説き降したまえる文相起尽を案ずるに、正しく最初の「称自り終
 焉の唱念に至るまで、皆な悉く引業と成ると見えたり。然る所以
 は、三聖の言、一轍にして能別の説無きが故なり。亦た初め従り
 終りに至るまでの妙行、九品の増進二転の資糧と成るべき者か。
 此れ等の詳評、「多業引一生、一業通引満」の論文に依りて之れ
 を勘定するのみ。来賢、眼を三祖の直語に著けて、之れを看取せ
 よ。黒谷祖師、亦た此の義を存す。学者自ら知れ。於^あ、観るに夫
 れ、金谷^{きんこく}に遊ぶ者は驕佚^{きょういつ}を緯^{いと}として空しく晩^{くら}し、甕牖^{おうゆう}に仄^{せま}る者
 は窮困を感じて徒らに明かす。若し仏名を持たずんば、出要焉^{しゅつよう}ん
 ぞ貯えん。黒業^{くろごう}は日に随いて累^{かさね}り、黄泉^{こうせん}は時と競う。六合^{りくごう}の善
 逝、之れが為に哀涙を冥空に灑ぎ、護法の諸天、所以^{このゆえ}に憫色を幽
 巷に示す。誰れの道人か之を惶怖^{こうふ}せざらんや。孰れの学者か之れ

(158) 『無量寿経』第十八願の取意か。

(159) 『観無量寿経』の「不能念者应称无量寿仏
如是至心令声不絶具足十念称南無阿弥陀

仏」の取意。

(160) 宗師：不明。

(161) 三祖：先に述べられた、弥陀・釈尊・宗
師のこと。

(162) 金谷：晋の石崇が洛陽に設けた別荘のこ
と。

(163) 驕佚：おごり高ぶってほしいままにする
こと。

(164) 甕牖：貧しく粗末な家のさま。

(165) 黒業：悪い行いのこと。

を慙^{ざん}恥^ちせざらんや。行者須く分に随いて之れを勤むるに暨^{おと}び、己を励して之れを行ずるに暨^{おと}ぶべきのみ。

問うて曰く、廻心持念の最初の一声を以て往生の引業を決定し成熟して、必ず生死を解脱することを得れば、行人、終焉の時に何ぞ如入禅定の相も無く、雨華光明の瑞も没^なきや。若し奇瑞顯現せずんば、何を以てか決定往生と知らんや。

答えて曰く、或る先達は云わく、念仏の行者は設い身壞命終の時に至りて狂妄顛倒すと雖も、必ず応^ま当^さに決定往生の巨益を得べし^云。或る先達は云わく、設い持名の行人なりと雖も、若し鶴林命終の期に曼^まんで苦受来迫して身心安恬ならずんば、決定即詣の人とは把定し叵^こかるべし^云。今謂く、此の両解俱に宜しからず。子等^{なんじら}、早く往ね。夫れ若し初解の如くんば、身心無苦・身心快樂^めの義を忘れたるに似たるが故に太過の失に墮せり。若し次解の如くんば、死病の二苦・墜墮三途の相を分かたざるが故に太滅の過を招くなり。今、中様の道理を勘判して、以て学者の泥滯を撥却せん。所謂る若し西方の行者等有りて、直ちに尊号を持ちて、

(166) 如入禅定：善導『往生礼讚』（浄全四・三六〇上）。一般的には善導「発願文」と呼ばれるもので、往生人の臨終の心構えが説かれている。

(167) 身心無苦身心快樂：善導『往生礼讚』（浄全四・三六〇上）。

願行相資して終焉の時に至るまで等起(168)変ぜず。得繩(169)断えずんば、必ず感降有りて、定んで往生を得べきなり。

問うて曰く、若し爾らば盃なんぞ甚深楞嚴の三昧(170)に入るが如くならざるや。亦た焉いづくんぞ雨華音楽の兆瑞無きや。

答えて曰く、必ず有り。抑君そもそもは經説の指帰を知らずして、僻謬の邪難を致せり。今、正しく君に問わん。夫れ經釈の文に、聖衆、蓬室の窓(171)に臨み、奇雲、禪房の軒めくに繁り、音楽、蒼天の上に奏し、妙華、松門の庭に積み、光明、室に満ち、金台、趺あしを承くる等の諸の奇瑞を挙ぐる事、是れ傍人の所見を説くとや為ん、將た行者の独感を明かすとや為ん。

時に問う者、緘かん口くして而に言わず。小子、勝ちに乗じて曰く、君、上に問うて如住三昧の相は十に之れ一二(172)も無く、雨華音楽の瑞は百に之れ三五(173)も無し。若し爾らば、決定往生の人とは把定し匡しと曰うを以て、而も之れを推すれば、方に經に之れ挙ぐる所の諸の兆瑞等は、皆な傍人の所見に約して、以て之れを明かすことを得と聞こえたり。此れは是れ經文の裏を見て、道理の左(174)

(168) 等起：ある心作用や行為に相応し、それに等しく生起する業。

(169) 得繩：継続的行為の比喩表現か。

(170) 甚深楞嚴之三昧：首楞嚴三昧のこと。け

がれを摧破する勇猛な仏の三昧の一種。

(171) 蓬室之窓：蓬の生い茂った窓のこと。転じて粗末な家を意味する。

(172) 緘口：口を閉じて何も言わないこと。

(173) 道理之左：証左となる道理のこと。

見る者なり。是れ盜跖とうせきが再び来れるか、達多たつたが重ねて生ぜるか。抑おさ未審もいしんし。今、正しく秦鑑しんかんを取りて、以て君が迷闇を照らさん。夫れ経論解釈等の中に往生の先兆を明かすことは、正しく是れ行者の所見に約して、以て之れを挙勸して余には非ざるなり。若し爾らば、何ぞ看病人・善知識等の諸の傍人の所見の有無に就いて、以て行者の往生の得不を論ずるや。宛も輓ながえを北にして楚ゆかに適あんとするが如く、猶お後に歩んで前に進まんとするに似たり。相い背けること万万なり。若し如住三摩地・雨曼荼羅華等の諸の勝縁勝境は、只だ是れ行者の密証・内感にして、余類の外見・通感に非ずと言はば、何ぞ応に他人の未見を以て行者の生不を定むべきや。

『法華』に曰く「唯だ独り自ら明了にして余人の所を見ず云」と。抑おさ又た止ただ聖衆現前、蓮台来迎の義のみにして、行者の独見に約して以て之れを説くに匪ず。又た獄苦来逼、火車相現等の事も皆な是れ悪人所見の辺を宣べて余には非ず。

時に彼の人云く、此の事寔まことに然らんか。但し諸の和裏をり・大漢の

(174) 盜跖：『莊子』や『韓非子』にも登場する中国の春秋時代の盜賊の首領。中国の古代を代表する盜賊の頭。

(175) 達多：提婆達多のこと。

(176) 秦鑑：秦の始皇帝が人の心の善悪や病氣の有無を照らして見たといわれる鏡のこと。

(177) 北輓適楚：輓ながえ（車のかじ）を北にして、南にある楚ゆかに適あくことで、言動と行動が相反していることを意味する。

(178) 『妙法蓮華經』（正蔵九・五〇上）。

(179) 和裏：日本のこと。

往生伝等の中に、正しく傍人所見の靈瑞を出だせり。又た當時八荒四流を見聞するに、現に傍人有りて、或は万種の音楽を尽虚空界に聞き、或は五色の瑞雲を西山の嶺峯に見る。斯の事奈如ん。

答えて曰く、此れは是れ別途感應にして経論の意にあらず。有縁の者は之れを見聞し、無縁の者は之れを知らず。若し応に見て宜しかるべきの人の為には之れを見聞せしめ、若し応に聞て宜しからざるの類の為には之れを隠密せしむべし。見と不見と、聞と不聞と、皆な是れ冥衆の善巧なり。例せば夫の双林涅槃の時会の衆の如し。学者怪しむこと勿れ。

問うて曰く、傍人の見聞する所の奇雲音楽とは、孰人の所作を視聽するや。

答えて曰く、此れは是れ欲色諸天の所作にして、西方聖衆の奏する所の楽音にはあらず。言は、行者等応に争か凡身有漏の六根を以て、淨刹無漏の境界を見聞すべけんや。夫れ十号没陀の進止往来したまうときは、則ち必ず梵天、宝蓋を捧げて後

(180) 八荒四流：八荒は八方・国の隅々、四流は中国の四大河川〔長江・黄河・淮水・赤水〕の意で、世の隅々という意。

(181) 双林涅槃時會之衆：『大般涅槃經』「壽命品」（正藏一・三六五下）に説かれる釈迦涅槃の際に種々の供養をしようと次から次へとやってくる者達のこと。多くは釈尊がこれを断るが、純陀の施しは受け。縁ある者と縁なきものを例えたもの。

(182) 欲色諸天：欲界色界の諸天。

ろに陪し、帝釈、玉履を資りて前に蹲る。梵衆、梵輔は大梵天王に翼従し、四天四部は釈提桓因に輔伏す。此れ等の諸天は遍身に常に奇香を手口に発し、恒に妙楽を作す。傍人見聞する所の事は皆な是れ諸天の所作ならん。復た次に欲令すらく、設い傍人なりと雖も、他力加被するに依て界外無漏の境界を見聞するに何の不可か有らんや云。曰く敢て之れを問う。曰く、傍人の所見二義有りと雖も、行者の所感に於ては応当に二つ俱に之れを見聞すべき者なり。往生の当機なるが故に。彼此界内なるが故に。

問て曰く、設い所感の境界は正しく行者の密感を宣べて余に非ずと雖も、行人往生の時には必ず当に心の憂いも悉く除き、身の苦も皆な去りて、身心俱に恬怕にして往生を得べし。然るに今諸方を見聞するに、設い名号の持者と雖も偃臥定らず、手に虚空を把り、舌其の唇を舐り、遍身に汗を流す。然るに『守護経』に依りて之れを觀れば、此れは是れ墮在三途の悪相なり。若し爾らば、焉ぞ「必生彼国の人」と治定せんや。

答て曰く、大聖世尊を除きて以外は、皆な疾苦及及び断末摩

(183) 十号没陀…仏の十号、没陀は *Bhadra* の音写。

(184) 釈提桓因…音写語。帝釈天の異名。

(185) 恬怕…静かに安らいでいるさま。

(186) 偃臥…うつ伏して心地よく寝ること。

(187) 般若訳『守護國界主陀羅尼經』卷一〇（正藏一九・五七四上〜中）。本經では釈尊が阿闍世王に対して、地獄に墮すときの臨終の相として一五種、餓鬼に生ずるときの臨終の相として八種、畜生に生ずるときの臨終の相として五種を説いている。

(188) 治定…決定すること。

水等の重苦有り。何に況んや底極廝下の凡夫、臨終の時、豈に此の二苦無からんや。若し此の二苦を受くる者は偃臥定まらず、白汗流れ出て、愁歎の苦声、室に満てんものか。然りと雖も往生の定業を最初の一念に定め、得繩・等起を最後の意心に改めざるの行者に於ては、決定して当に極樂に往生することを得べし。若し往生を得れば、三途の苦相、豈に現前すべけんや。之れに依りて之れを言わば、念仏行者の終焉の苦惱は只だ是れ死病二苦にして獄苦来逼には非ざるのみ。

問て曰く、古今の明哲、皆な曰く、「誰か曰う、念仏の行者は定んで死病の二苦無し」と。設い定生の人と雖も必ず此の二苦に依りて身壞命終するなり。但し若し正しく命終の期に近づかば、二苦俱に去りて身心同じく安からんか。若し苦と俱に終らば、尤も之れを怪しむべきものをや、如何。

答う、此の問、非なり。夫れ人の命終に就いて頓・漸の二相有り。若し頓の命終の人ならば、苦と声と俱に終らんに何の相違か有らんや。

(189) 断末摩水等…「末摩」は *manan* の音写で、身中の部位の中、ここを損傷すると死ぬとされ、臨終の苦しみを形容し、「水等」は水火風の三大のこと。

(190) 底極廝下…劣悪な境遇のこと。

(191) 白汗…失訳『五王経』には人が死ぬ時に白汗を流すとあり、『守護國界主陀羅尼経』には畜生に生ずるときの五種の臨終の相の一つとして「遍体流汗」とある。

(192) 愁歎苦声…歎き苦しむ声のこと。

(193) 注(168)・(169)参考。

問て曰く、往生の人は必ず聖迎を感ずること大・中・小の三典の文、分明なり。『経』に來迎の勝用を説きて云く「慈悲加祐令心不乱⁽¹⁹⁴⁾」と。又た説かく「以見我故離諸障礙⁽¹⁹⁵⁾」と。若し爾らば、豈に正念に住して身心安泰ならざらんや。

答て曰く、此の事、已に上に之れを明かせり。何ぞ重ねて之れを問うや。『経』は行者の内心を宣べ、苦は病人の外相を明かす。正念と苦相と其の義、霄壤懸隔⁽¹⁹⁶⁾なり。雷同すべからず。康存の日も、苦と正念と其の相、大いに各別なり。学者自ら知れ。設い又た苦念と俱に終るとも、等起変ぜずんば定んで往生を得べし。是れ則ち往生は行業に依りて苦念には由らざる所以に由りてなり。

問て曰く、比日、多く見るに、六識分明の人、終日に及びて念仏せずして、或いは二時三時を経て、或いは一日一夜を隔つる有り。此れは是れ何に由りてか爾るや。

答えて曰く、設い意念正しく存すと雖も風大早く去るに依りて爾るか。

(194) 玄奘訳『称讚浄土經』(浄全一・一八八上)。
(195) 曇無讖訳『悲華經』(正蔵三・一八四中)。
(196) 霄壤懸隔…天と地ほどかけ離れていること。

(197) 康存之日…存命中の日々。

問て曰く、豈に性相に云わざるや。悪人は風大、先ず去る故に
大苦有り。善人は地水、先ず去るが故に苦患無し。持名の人、豈
に善人に非ずや。若し爾らば、所答、文理を失せり、如何。

答えて曰く、性相は自ら是れ一途にして一切には関るべから
ず。矧いひんや又た念仏の行者は、多くは是れ下輩下行下根の人なり。
風大、先ず去らんに何の不可有らんや。抑おさ五眼・六神通・十
力・四無畏・大悲三念住・十八不共法等は是れ大聖所具の別徳な
り。若し五眼の中の天眼、六通の中の天眼通、及び十力の中の
第九の死生智力等を具せずんば、争か衆生の此の死生、彼の相を
知らんや。然るに今、凡情の邪念に住して、忝けなくも得繩不断
の行者、往生得不の相を評判すること、尤も応ぜざる所なり。応
に早く自由の邪判を翻じて以て、応法の正信を生ずべき者なり。
大都おおほ、諸方の学者の談話を見聞するに、康存廻心の人に於て、或
いは往生を臨終の微苦に判じ、或いは出離を鶴林の外瑞に定め、
又た即詣を身壞の十念に取り、又た定生を最後の端坐に知る。是
の如きの解を生ずるの人は、是れ年長なりと雖も学少なし。是れ

学久しと雖も解短かき庸輩なり。夫れ康存所唱の称名と終焉持誦の念仏とは、其の所行の体斉しくして無二なり。若し鶴林称名は決定往生の正因ならば、平常の念仏も亦た定得即詣の直業ならん。若し平生の念仏不定ならば、没期の持念も亦た出離未定ならん。若し爾らば、同一の称名に於て平生の持念を以て、以て不定と為し、最後の称名を以て、以て治定と為するの辺見を起こすこと勿れ。

按ずるに平生不定・臨終決定とは、此れは是れ庸輩の浮詞にして、全く釈典の明文に聞からず。慮いを静めて深玄を案ぜば、定んで教意を知らんか。

祖師上人曰く、^(四)

平生の念仏、臨終の念仏、全く同じにして異なり無し。設い平生念仏の想いを作すと雖も頓かに死すれば、即ち是れ臨終の念仏なり。設い臨終称名の思いを作すと雖も、命延ぶれば即ち平生の持念と為るなり^{已上『要義抄』}。

所判分明なり。行者、平生念仏は是れ不定往生、終焉称名は乃ち

(198) 法然『念仏往生要義抄』(昭法全六八六頁)。ただし文言が異なる。

決定即詣と謂うこと莫れ。

彼の人反難して曰く、我も凡夫にして十力を具せず。君も異生にして死生智無し。若し爾らば、何ぞ人を沮おどして我を存せんや。

答えて曰く、我れは或いは聖教量に依りて語を為し、或いは大道理に依りて判を為す。其の道理と言わば、等起不変・得繩不斷の大道理なり。其の聖教量と言うは、「若不生者不取正覺」の聖教量なり。

彼の人云く、我れも亦た二義に依りて、以て義を立せんとなり。

小子尋ねて曰く、今正しく之れを見聞せん。彼の人面に陸梁リウリョウの氣のみ有りて、語に一の文理無し。夫れ所詮、従上の義に成立する人は、最初の廻心の一念の妙業を編さみし、妄りに臨終仰頼の一文のみを執し、等起得繩の性相に迷いて、当代所修の念仏のみを知る。此れ等の人は皆な、大乘修妬路シュトダロの達士にも非ず。亦た小大性相の学者にも非ず。更に名づくる所無からん。唯だ雀を捕るに目を掩おほい、鈴を盗むに耳を掩おほう。庸愚なり。若し爾の如く云わば、後念の徳をのみ賞して、前念の功を忘れたる者なり。若し爾

(200) (199) 陸梁：勝手気ままにあはれまわること。
修妬路：ストラの音写。

らば百二十年中の日日時時の所作皆な徒らに施し、更に得る所無けん。黒谷上人、空阿大徳(201)に書き与えたまえる法語に云く、

正念の時、称名の功を積めれば、設い臨終に称名念仏せずと雖も、決定往生するの由(ゆえ)、『群疑論』に見えたり

此れは是れ、予め終焉の時に及んで念仏せざる者は、往生を得

ずというの邪執(くじ)を折(く)くのみ(正平九年十二月六日、天王寺瓦堂に於て、予正しく上人御自筆の書を得て、随喜渴仰極まり無し、所以に後進の為に之れを此

こに続く。学者、思察せよ思察せよ。

大凡そ如来本願の意を案ずるに、初念後念俱に之れを摂し、有苦無苦同じく之れを迎う。若し爾らば行者等、最初引業の決心を堅め、得繩不斷の性相を信じて以て多載の漆桶(しつづ)を破り、累年の痴迷を散ぜよと。執者、之れを聞きて服膺(ふくよう)して去りぬ。曰く、
敢えて之れを問う。

曰く、父師光公和尚(206)、一類の執者の病苦と死苦と及び獄苦の来逼することを分かつたずして、直爾に狂妄往生の義を建立することを挫かんが為に、且く別意を以て是の如くの説を作す。其の実は全く病死二苦と俱に終らん人、定んで往生を

(201) 空阿大徳：空阿は蓮華谷明遍と空阿弥陀仏の二人が挙げられる。ここでは「法語を書き与えた」とあるため、空阿弥陀仏であると考えられる。

(202) 出典不明。

(203) 漆桶：無明、または妄想や執着のこと。

(204) 服膺：常に心にとどめて忘れないこと。

(205) 出典不明。

(206) 父子光公和尚：聖光のこと。

得ることを遮せず。

此れは是れ文外の口授なり。知らんと欲せば来学せよ。抑倭そもそも

漢九師(207)の靈誥を蒙りて、従上一科の法門を立てて以て、中華辺夷の学者に示す。無繩自縛の執者は未だ曾て服膺せず。過而能攻の智人は舌を鳴らして感歎す。篇成りて世に行うこと已に両三祀なり。

或る時、祖師然公和尚の遺典を得て以て始めて諸聖の靈誥の上人の定判に符契せることを知れり。如何が符合する。曰く、(208)

或る人問うて曰く、我れ常に終焉安樂・少病少悩・起居軽利・正念現前の事を祈念す。此の義如何と。

上人答えて曰く、設い祈願成就して鶴林に風癩無しと雖も、一切の衆生等は未だ必ずしも大聖世尊にもあらず、三界の特尊にも非ざるが故に、必ず断末摩の大苦悩を受く。其の苦悩の体、為すること百千の劍矛の骨を碎くにも過ぎ、無量の毒箭の体に入るにも起えたり。眼目有りと雖も色を見ること能わず。舌根有りと雖も言語も及ばず。麤く出て、喉舌乾き焦

(207) 倭漢九師：浄土五祖と法然・聖光・良忠・良暁を指すか。

(208) 出典不明

がれて、水を下すこと能わず。筋脈断絶して刀風形を解き、支節舒緩し機関止廢して動転すること能わず。拳体酸痛す。是の如きの大苦受説き尽くすべからず。八苦の中に於て自余の七苦は設い遁れ免れること有りと雖も、断末摩の一苦に至りては更に免脱すること無し。所以に設い穢土を厭いて浄土を欣い、別願を信じて名号を唱うる行者なりと雖も、必ず応に此の苦患に値うべし。設い大苦忍び難きが故に悶絶して呼吸永く通ぜざれども、弥陀覚王の護念救済に依りて必ず正念に住して浄土に往生すべし。夫れ魂識、冥界に去ることは疾きこと糸髪を斬るの頃に過ぎたり。凡夫の外見、其の相を定め難し。唯だ如来と行者とのみ乃ち能く之れを知るのみ。加以、終焉の時には三種の愛心発現す。四種の魔障競い来りて行者をして正念を失せしむ。此れ等の諸障、唯だ善知識の力ちからのみにして之れを撥却し巨きが故に、阿弥陀如来本願を捨てずして衆と与ともに来現して能く諸障を調伏して西方に引導したまえり。憑むべきは「以見我故離諸障礙即便捨身来生我

界」の金言なり。仰ぐべきは「仏恐四魔」「仏陀迎來諸邪業繫無能礙者」の高判なり。(已上。和を以て漢と為す。)

夫れ今此の縑緇(けんしゅう)を見るに随喜の涙、下ることは是れ數行、亦た渴仰の志、動くこと乃ち且千(しせん)なり。寔に是れ即詣の券契(けん)、亦た是れ直往の印信(いん)なり。謹んで静かに書意を按ずるに、既に死苦と与(とも)にして悶絶命終すと曰う。豈に命終以前に死苦止息すること有らんや。又た「仏と行者とのみ乃ち能く之れを知るのみ」と曰う。寧ろ外人の知る所ならんや。此の兩条は行人の心鏡、長夜の巨灯なり。仰ぐべし、頼むべし。

然るに世人皆な終者の相貌を見て往生の得不を断ずるのみ。学者未だ仏にあらず。若し仏に非ずんば全く十力・五眼・六神通等を得べからず。若し死生智力・天眼智通無くんばんぞ衆生の此死生彼の相を知見せん。若し之れを以て之れを語(い)えば、世人の評判は正しく是れ衆盲の象体を弁じ、諸瞽の乳色を陳ぶるの謂いなり。然れば則ち是れ無利語、是れ無益語、是れ無義語、是れ無記語なるのみ。慎しむべし、慎しむべし。

(209) 『悲華經』(正蔵三・一八四中)。

(210) 善導『法事讚』(淨全四・二下)。

(211) 善導『觀經疏』(淨全二・四九上)。

(212) 縑緇…書物のこと。

(213) 且千…甚だ多いさま。

(214) 券契…証文のこと。

(215) 印信…印可証明のこと。

請い問う。曰く、従上所引の上人の法語は、人皆な之れを知れり。汝胡ぞ見ざるや。畜だ小子独り之れを得たるのみに匪ず。亦た知恩院の別当法印大和尚位舜昌しゆんじやう、之を得て祖師行状画図の詞と為り。

問うて曰く、上人の法語を得て以て所立の義を潤色じゆんしきするの丹青たんせいと為さば、吾れも又た上人の遺典を得たり。之れを挙出して以て君が立義を挫折せん。所謂る吾が祖上人の書する所の『浄土宗略鈔』に云く、

夫れ真実まめやかに往生西方の志有るの人、深く阿弥陀如来の本誓を憑たのみて穢土を厭うて名号を唱えば、命終の時に臨みて全く悪相を現あらわすべからず。其の上如来来迎したまう。正しく是れ行者をして正念に住せしめんが為なり。人皆な此の意を会せずして妄りに計して曰く、行者自ら正念に安住して尊号を唱念するの時、弥陀覚王始めて降臨影現したまうべき云と。

此の如きの人は、弥陀如来の別意弘願の大利を信ぜずして、牟尼薄伽の三部洪典の明文に致背する庸愚じゆんぐの邪類なり。

(216) 舜昌：一二五五―一三三五。知恩院第九世。後伏見上皇の命により『法然上人行状画図』四十八巻を十余年かけて完成させ、その功により知恩院別当となる。

(217) 潤色：文に彩りを加えること。

(218) 丹青：はつきりとして疑う余地の無いこと。

(219) 法然『浄土宗略鈔』（昭法全五九六一―五九七）。但し文言が異なる。

(220) 庸愚：平凡で愚かな人のこと。

所以は何ん。夫れ行者の平日念仏の功力に依じて弥陀聖衆必ず来迎したまう者なり。九品の教主を拜し、恒沙の聖衆を見たてまつるの時、即ち心顛倒せず正念に安住す。所以に『称赞浄土経』には慈悲加祐令心不乱と説きたまえり。至乃「凡そ本自り浄土を欣求し名号を称念するの人は、未だ必ずしも臨終善悪の沙汰有るべからざる者なり。若し聖衆の来迎一定ならば、臨終の正念も決定なるべし。一切の西方の行者等、深く此の心に住して、猶予を懐くこと勿れ。」云云

此の語処処に散ぜり。纏説するに違あらず。矧んや亦た君が引証する所の法語の中に、「正しく如来護持の力に依りて安住正念の益を得」と宣べたり云云。之れを以て之れを觀れば、君が所立の苦切狂妄決定往生の義、更に成立せざる者なり。如何。

答えて曰く、於、子何ぞ拙きや。於、子何ぞ拙きや。而若し師曠が聡耳を擡げて以て此の説を聞き、顔淵が愍心を借りて以て此の義を領し、離婁が明眼を開きて以て此の論を看れば、茲の如きの左道の繆難を致さず。吾れ豈に上来往往に云わざるや。

(221) 法然『浄土宗略鈔』の一節と思われるが、該当箇所不明。

(222) 師曠：中国春秋時代の晋の平公に仕えた楽人で琴の名手。盲目であったが非常に優れた耳を持つていたとされる。

(223) 顔淵：孔子の弟子。中国春秋時代の魯の人。一を十を知る人の聰明な人物であったとされる。

(224) 離婁：中国の伝説上の人物。黄帝時代の人とされ、視力がすぐれ、百歩離れた所からでも毛の先がよく見えたという。離朱ともいう。

(225) 左道：正しくない道。邪道。

苦受逼迫は是れ終者の外相、正念現前は廻ち行人の内心なりと。若し爾らば而なんじが引き備うる所の文証は、正しく是れ小子所立の行者、命終の内心正念の義を潤色するのみ。然るに今、此の文を出して以て論主の立義を沮ほほまんと欲すること、譬えば天を以て地と爲し、夏を以て冬と爲るが如し。学者自量せよ、学者自量せよ。

抑そも当章の起りは、元是れ世人等、死生智力・天眼智通無くして病人終焉の外相を見て、以て其の往生の得不を勘判することを折くじかんが爲なり。卓拔高識の智人、此の玄妙を会得して茲の論文を学知せよ。若し読み得て透徹せば、自ら無窮の滋味有らんか。若し愚ぐん芻の彙くしんいに有りて古執を堅せば此れは是れ十万八千のみ。

問うて曰く、夫れ「現其人前現」は是れ慈父弥陀氏の本誓なり。「離諸障礙離」は乃ち悲母能仁氏の誠言なり。之れを以て之れを觀れば、決定往生の人の身壞命終の時時は全く苦受逼迫有るべからざらんや。若し爾らば所立の趣、何如。

答えて曰く、欣求西方の行者未だ必ずしも大聖世尊にもあらず。豈に断末摩の大苦無きことを得んや。但し「以見我故離諸障

(226) 『無量寿経』(淨全二・七〇八頁)。
(227) 『悲華経』(正蔵三・一八四中)。

礙⁽²²⁸⁾」の文に至りては、夫れに憂苦二受と留難障礙と其の相、已に各別なり。焉ぞ彼を引きて之れを折^くかんや。如何が各別なる。謂く憂苦は是れ病死二苦なり。障礙乃ち四魔三愛等なり。学者混淆すること莫れ。又た、設い二苦を以て諸障礙に摂して以て、其の義を詳判すと雖も何の違越か有らん。

問うて曰く、其の義如何。

答えて曰く、行者の見仏に早晚有るに由りて爾なり。

問うて曰く、何なるが是れ、見仏聖衆の遅疾に依りて有障無障の不同有るの義なるや。

答えて曰く、将命終の位に至りて即ち其の二有り。一には明了位、二には自体愛位。初めの明了位に亦た其の二有り。初めには六識、俱に現前す。次に唯だ意識にして境を縁ず。初めの六識、明了の位に於て、三尊の来迎を拝し、九品聖衆を覩たてまつるの人は、此の位中に於て、「以見我故離諸障礙」の巨益を蒙るなり。夫の懷玉禪師十指を合わせ、道生法師四句を頌せしが如きは是れ其の類ならん。此れ等の人は二苦微薄にして四魔、跡を削り、

(228) 『悲華經』(正藏三・一八四中)。

(229) 懷玉禪師：中国唐代の僧。『宋高僧伝』によれば一日に五万遍弥陀を念じ、生涯にわたっては『阿弥陀經』を三十万卷説誦しており、阿弥陀三尊を見仏したとされている。

(230) 道生法師：三五五―四三四。中国南北朝時代の僧。初めは廬山の慧遠、後に鳩摩羅什に師事する。法顕訳の『泥洹經』に注目し、闍提成仏を説いた。

終焉無苦にして正念に安住せしこと左右に能わず。次に自体愛の位に於て聖衆の來現を拝する人は、此れは是れ微細意識の意見なるが故に、傍人其の心中を知らず。唯だ仏と行者とのみ其の正念見仏を知るのみ。又た一類有りて、応に將正二命終の位を過ぎて往生中有の初めに至りて「見仏色身衆相具足」⁽²³¹⁾すること有るべし。此の人は二苦ともにして命終すべし。然る所以は將正の位に於て未だ見仏せざるが故のみ。設い二苦と与にして悶絶命終すと雖も決定往生すべし。何を以てか知ることを得る。三心成就するが故に、得繩絶えざるが故に、等起不変の故なり。

問うて曰く、君は行者の眼見、及び意見に約して以て見仏得益の義を成立す。吾れはに反して以て義を取らん。何なるか是れ自他背反の義なる。謂く、夫れ聖衆來迎は正しく是れ將命終の位自りす。若し爾らば、或いは行者の眼意の二見にもあれ、或いは二見俱に無きにもあれ、応に同じく見仏と名づくべし。所以は何ん。応に來迎を以て見仏と名づくべきが故なり。何んが聖衆の來現を以て行者の見仏と名づくとならば、其の例一に非ず。且また『法

華』第二に長者窮子の見、不見の相を説きて曰く、

爾時窮子、備賃展転して、遇たまたま父の舎に到る。門の側に住立

して、遙に其の父を見れば、獅子の牀に踞して、乃窮子、父

の大力勢有るを見る上上と。

円宗の大師之れを受けて曰く、「機中に潜密ひそかに冥に此の事有り。

是れ頭に対して勝応身を見るに非ず」上。此れは是れ眼見にも非

ず、意見にも非ずと雖も経文に、或いは如来、長者の見到に約し、

或いは冥有此事の義に約して、以て「遙見其父窮子見父」と説け

り。彼に準じて之れを思えば、今「以見我故離諸障礙」と言えるは、

未だ必ずしも行者の眼意の二見を指すにはあらず。只だ是れ聖衆

の来現を指して以て見仏相好と謂うか。若し爾らばか苦ながら死

するの人有らんや。如何。

答えて曰く、夫れ君、多言すと雖も文に非ず、義に非ず。既に

「以見我故」と曰えり。若し眼意の二見到に非ずんば何ぞ此の如く

云わんや。君、会して行者の二見到に非ずと雖も海会の聖衆、松門

の戸に臨みて行人を護持し、六八の願王、蓬室の中に入りて行

(232) 『妙法蓮華經』（正蔵九・一六下）。

(233) 備賃：労働に対して支払われる賃金のこと。ここでは転じて生活の糧を得るのに働いたための場所。

(234) 獅子牀：獅子の毛皮を敷いた長椅子。

(235) 円宗大師：天台大師智顛のこと。

(236) 勝応身：応身を勝劣二身に分けたうち、すぐれた機根の者が見る仏身。

(237) 智顛『法華文句』（正蔵三四・八三上）。

(238) 松門戸：松門は虚しいの意であることから、娑婆世界のこと。

(239) 蓬室：蓬は乱れるの意であることから、娑婆世界のこと。

者を加被したまうが故に、正命終爾前に二苦早く除き、五内速(240)穩なるべしと言うは此の義然らず。或いは「無量寿仏化身無数常來至此行人之所(241)」と宣べ、或いは「衆生念仏念衆生彼此三業不相捨離(242)」と判ず。是れ行者の平生感応(243)の相を明かせるなり。然りと雖も二魔猶(244)お侵し、六苦(245)愛怨(245)五常(245)に逼む。之れを以て知るに、行者の終焉、聖衆來迎すと雖も、若し眼意の二見無くば「離諸障礙」の巨益に預るべからざる者か。「以見我故」の因有るが故なり。此の義、因明学者に問うて其の義趣を知れ。抑(246)又た而(246)が引き来たす所の『法華』の一文に就きて之れを思うに、二乘未だ長者の尊特を見ざるが故に、未だ聞法修習・入聖得果の益有らず。彼に準じて知るに、今、設い聖衆來現したまうと雖も、若し行者等未だ之れを覩見せずば、豈に二苦諸障を除くこと有らんや。

諸(247)請(247)い問う。曰く、彼に擬宜(248)の益有る等に準じて之れをええば、今も亦た微微の益有らんか。

今「以見我故離諸障礙」と言うは、四魔短を伺わず、三愛悉く除却し、二苦消滅し、業障礙えざる等の一切の大利益に約して、

(240) 五内：肝、心、脾、肺、腎の五臓のこと。

(241) 善導『観念法門』（浄全四・二二八下）。

(242) 善導『観経疏』（浄全二・四九上）。

(243) 平生感応：衆生に機根があれば仏の力がおのずから応じ、衆生の感と仏の応とが平生において互いに交じり合うこと。

(244) 二魔：四魔を分類した内魔と外魔のこと。

(245) 擬宜：試みに説くこと。

以て言を為すなり。学者、彼此混一して以て義を取ること莫れ。

問うて曰く、上に「中有見仏」と言うは、其の義如何。

答えて曰く、夫れ一切衆生生じて中有に在るの時、諸仏如来、其の中有の人の前に現じて、種種安慰して、為に妙法を演説し、教えて修習せしめて諸有を出離せしむ。止ただ総じて他仏の教化を蒙りて、以て稟教入聖するのみに匪ず。又た別の西方の白業〔246〕を修習して、以て往生極楽の人有り。若し爾らば、爾前心行具足の行人、中有の位に於いて、始めて願王の聖容を拝せんに、何の不応が有らんや。

難じて曰く、若しは中有一七、中有七七の義〔247〕にもあれ。若しは又た生縁未合、中有恒存の義〔248〕にもあれ。其の時分長きが故に、諸仏教化し衆生得脱せんこと、義に於いて相違無し。然るに今行者往生の捷疾頓速なること、或いは念頃の如く、或いは弾指の如し。豈に此の頃に於いて、聖衆を觀見すること有らんや。

答えて曰く、見仏聞法の利益、広く長短の時分に通ず。若し爾らば、「低頭礼仏在此国拳頭已入弥陀界〔249〕」の中間に於いて、弥陀

(246) 白業：善い行い。黒業に対して言う。

(247) 『俱舍論』（正蔵二九・四六中、下）参照。

(248) 『俱舍論』（正蔵二九・四六下）参照。

(249) 善導『往生礼讃』（浄全四・五四四上）。

の尊容を拝して、西方の宝刹に詣でんこと、何の疑に怪が有らんや。

問うて曰く、本有見仏行人と中有見仏の行者とに於いて、其の乗宝蓮台の先後を論ぜば、其の義相如何。

答えて曰く、二人の乗台同じく是れ本有の身を捨てて、中有の生に至る。初刹那ならんや。何の言ぞや。謂く『観経』に曰く、

爾の時彼の仏、即ち化仏・化觀世音・化大勢至を遣わして行者の前に至らしめ、讃じて言く、善男子、汝仏名を称するが故に諸罪消滅せり。我れ来りて汝を迎うと。是の語を作し已りたもうに、行者即ち化仏の光明、其の室に遍満するを見る。見已りて歎喜して即便ち命終し宝蓮華に乗じ、化仏の後に随いて宝池の中に生ず上巳。

慈氏所説の瑜伽第一に云く、「死と生とは同時なり。称はかりの両頭の低昂、時等しきが如し」上巳。

夫れ経を以て論に合し、其の義趣を詳勘するに、二人俱に捨本至中の時に於いて、始めて金台に乗ずるのみ。

(251) (250) 『観無量寿経』(浄全一・四九)。
弥勒『瑜伽師持論』(正藏三〇・二八二上)。

問うて曰く、既に見仏に早晚有り。豈に乗台に先後無からんや。如何。

答えて曰く、此の問不類なり。經に「行者即見化仏光明」と説けるは、是れ即ち將命終位の、明了位と自体愛との二位に見仏來迎あることを顯すなり。次に「即便命終」と言うは、即ち正命終の一刹那を指すなり。「乗宝蓮華」と言うは、亦た捨本至中の坐宝金台の位を指すなり。三句相生して以て別別の位を示すなり。智人看得せよ。次に論文に「死生同時」と言うは、言う所の死とは、是れ死有の一刹那なり。言う所の生とは、乃ち中有の初刹那なり。經に既に命終の乗台の文有り。応に知るべし、命終刹那後に、必ず觀音所持の宝台に端座す。此の義、文に載すること分明に理を得て揭焉けつえんなる者なり。

若し爾らば而して見仏に遅疾有る者は亦た乗台先後有りと謂うこと勿れ。卓拔の智者自量せよ。卓拔の智者自量せよ。

問うて曰く、或いは本有將命終の時身を金台に寄すと曰い、或いは死有一刹那の頃に趺を宝蓮に託すと曰うに、何の違越有りて

而も頻りに匍ののして中有乗台の義を存するや。

答えて曰く、若しは本有にもあれ、若しは死有にもあれ、二有殊なりと雖も猶お是れ流転の穢身なり。豈に汚穢の脚跟を以て清浄の華台を踐むことを得ること有るべけんや。道理必然たり。智人省察せよ。

請い問う。曰く性相既に「此一業因故如当本有形」⁽²⁵⁴⁾と曰えり。一業引の故には白業成就の人なり。如当形の故には五蘊清浄の輩なり。若し爾らば足、直爾ちに宝台を踐み、身、疾速に聖掌に託せんこと、尤も其の義を得たり。学者自量せよ。

請い問う。曰く『群疑論』第二に云く、⁽²⁵⁵⁾

彼の浄土に生ずる福德は力ら勝れたり。是れ中陰と雖も華に乗じて往生すれば、穢土の中陰の華無きには同じからず^上已。

学者見つべし。

今、一切の往生人に白して言く、夫れ値いがたくして値い、聆きき難くして聆きけり。是の行たなや、若し修せずんば、血に泣けども我れ独り胡なんの益かあらん。祀とじ我れと与ともならず、時、邁ゆきて齒よわい耆おいた

(254) (253) 出典不明。
懷感『釈浄土群疑論』(浄土六・二八上)。

り。詎れか意を一旦に快よくせん。將に苦を永劫に受けんとす。聖墳八万、一言以て蔽う。善く之れを行え。法は有縁を以て最と爲し、行は進趣を以て義と爲すと曰えり。速やかに此の聖言に順じて専ら其の愚胆を輾め。『老子』に曰く「善く行う者は、輾跡なし」と。『河上公章句』に曰く「善く道を行す者は、之れを身に求めて堂より下らず、門より出でず、故に輾跡無きなり」。道士の身を治むるすら其の勤め之の如し。仏法の内人、豈に恥じざらんや。若し爲すこと無くして空しく過ぎなば、定んで悔い有らん。設い悲悔すと雖も、則ち臍を嚙うとも曼び回し。之れを勉めよや。

抑小子、「与苦悶絶狂荒往生中有見仏蓮華化生」等の義趣を誌すとき、或る味道の君子、一人來謁す。先ず従上の草藁の本を相せしかば、時に披覽すること再びにし、三に、即ち其の真味を節用の処に翫び、之れが為に掌を撫し節を繋けて感服す。

問うて曰く、若し初念に決定の引業を成熟し、中後に等起得繩を變ぜざるが故に、決定往生の巨益に預かると言わば、設い廻心

(255) 『老子道德経』にあり。

(256) 『河上公章句』巧用篇にあり。

(257) 出典不明。

(258) 草藁本：草稿本のこと。

念仏以後、四重八重五無間等の大罪業を造作すと雖も、前念の大利全く存し、必ず往生を得るか。將た又た後の重罪に由りて前念の功德を消滅して往生の大利を失するか。如何。

答えて曰く、或が曰く、⁽²⁵⁹⁾

諸余の行業は滅不定なり。念仏の一善は曾て大小の後惡の為に滅せられず。功德存生するが故に決定往生す。『觀仏經』の泥団浮金の譬えに説く。以て誠証と為るに足れり云。

或が曰く、⁽²⁶⁰⁾

設い本願名号の功德と雖も必ず後の五無間等の重罪の為には消除せらる。大善已に消除するが故に、順次の往生を得ず。

但し汎爾の十惡等の諸罪は全く前念の大利を滅せず云と。

今謂く二俱に然らず。初解の如きは大いに『華嚴』『遺教』『大智度論』等の衆典の現文に背くのみに非ず。又た抑止門の意を存ぜざるが故に、尤も大過の過を招く者なり。次解の如きは或いは三昧法王大利無上の誠説に背き⁽¹⁾、或いは若不生者不取正覺の本誓に乖き⁽²⁾、或いは又た具足三心の念仏の行者に不生の一類有る

(259) 出典不明。
(260) 出典不明。

と云うにな為りぬ三是、又た撰取門の意を忘れたるに似たるが故に四是、専ら大減の失に墮する者なり。

難じて曰く、宗家の高判に云く、(261)

二河とは、即ち衆生の貪愛は水の如く、瞋憎は火の如くなるに喩う。中間の白道四五寸と言うは、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生の心を生ずるに喩う。乃ち貪瞋強きに由るが故に、即ち喩うるに水火の如し。善心微なるが故に、喩うるに白道の如し。又た水波常に道を湿すとは、即ち愛心常に起きて能く善心を染汚するに喩う。又た火焰常に道を焼くとは、即ち瞋嫌の心の能く功德の宝財を焼くに喩う。人、道の上に行きて直ちに西に向かうと言うは、即ち諸の行業を廻して直ちに西方に向かうるに喩う。至乃今二尊の意を信順して、水火の二河を顧みずして、念念遺わするること無ければ、彼の願力の道に乗じて、捨命已後、彼の国に生ずることを得て、仏と相まい見みえて、慶喜何ぞ極まらんや上巳と。

又た四祖感大師、詳判して曰く、(262)

(261) 善導『観経疏』(浄全二・六〇上・下)。
懷感『釈浄土群疑論』(浄全六・九四上・九九上)。

經に曰く「一念の瞋心は百千の法門を障う」と。又た言く「瞋
恚の害は諸の善法を破る。功德を却ける賊は瞋恚に過ぎたる
は無し」と。其の人、已前の觀行念仏等の善有りと雖も、皆
な瞋恚の為に損ぜられて、往生を得ず。至乃故に知んぬ、善惡
相違して更互たがいに相滅すということ。一生善を修して能く
善趣を感じべきもの、垂終に失念して諸の惡業を起こすが如
きは、遂に生まれてより来たこの一切善品を滅して、此の後、
惡に乗りて即ち三途に落つ上已と。

文相炳へい焉んなれば校難するに能わず。然るに今焉んぞ三昧証者の
両判に背いて、以て末学不肖の一義を立つるや。

答えて曰く、仁者但だ両師解釈の文のみを誦して、未だ二哲詳
勘の玄邃すいを窺うわず。先ず疏の第四の詳判に就いて自他酬酢しゅうそくすべ
し。夫れ中路の白道と言うは、是れ即詣の心行なり。其の広さ
四五寸にして、東岸より西岸に至りて断えざるは、是れ等起變ぜ
ず、得繩斬れざるの相貌なり。「火能燒水常濕」と言うは、伝説
すらく此れは三毒五蓋等の諸の煩惱、乃至一切の重重罪惡等、無

(263) 炳焉：あきらかなさま。

(264) 玄邃：学問や道理が奥深いこと。

(265) 酬酢：対応すること。

上大利の功德をして、少分減少せしむるに喩うるなり。豈に減少を以て悉滅と為し、夷路を以て絶道と為すべけんや。眼を著けて文意を看取せよ。「能焼法財」とは功德少減の意なり。「白道不絶」とは心行不失の義なり。若し読み得て透徹せば、自ずから無窮の滋味有らんか。設い念仏以後、四重五逆等の巨業を造ると雖も、若し退者に非ずんば、定んで白道に乗じて当に往生を得べき者なり。若し三心義の所判を以て功德永滅して、往生の大益を失するの援抛と為さば、文と義と乖角すること柄鑿（せいさく）の如く、似ざること弓と弦との如くならん。学者自量せよ。

次に四相感公の所判に至りては、或いは是れ師資違反の一失か。或いは又た寄在性相の密説か。或る人の曰く、⁽²⁶⁷⁾

余行は悪業の為に滅せられ、念仏は罪障の為に除かれざるなり。但し疏の第四に至りては、解釈の文相を詳らかにするに、人、道の上を行きて直ちに西に向かうと言うは、諸の行業を廻して直ちに西方に向かうに喩うるなり。之れを以て之れを観るに、「能焼法財」と言うは、且く諸行の辺に約して以て

(267) (266) 柄鑿：互いに食い違つて合わないこと。
出典不明。

語を為す。念仏の^{あずか}大善に^{あずか}関るには非ざるのみ云。

此の解然らず。文に甄別^{けんべつ}無くして、直爾^{ただ}ちに湿焼^{しつせう}と言う。然るに今何ぞ二行の強栗^{かうり}・滅不^{めつふ}・差別の義を成立せんや。豈に論蔵に云わざるや。義異なり有れば皆な別説す。豈に別説無くんば、定んで彼と同じからんと。之れに依りて之れを言わば、所立の義、忽ち胸襟の浮詞と為んぬ。

問うて曰く、念仏不滅の義を以て、重逆巨悪^{じゆうぎく}に翻じて之れを言わば、応に巨重の悪業亦た念仏の為に除滅せられずと言うべし。如何。

答えて曰く、此の難不類なり。夫れ「念仏誦経業障消除^{じゆ}」と言うは、総じては一代の通判、別しては三部の誠言なり。学者怪しむこと勿れ。何故ぞ爾るや。謂く、功德は真実なり、罪障は虚妄なるに依りて爾り。且つ註集^{しゆしゆ}二家俱に曰く、

云何が在心なる。彼の造罪の人は自ら虚妄顛倒の見到依止して生じ、此の十念は善知識の方便をもって安慰して実相の法を聞かしむるに依りて生ず。一は実、一は虚。豈に相い比す

(268) 甄別：はっきりと見分けること。

(269) 強栗：強弱のこと。

(270) 重逆巨悪：五逆と十悪。

(271) 出典不明。類似文として、善導『法事讃』(浄全四・二四下)に念仏誦経除罪障とある。

(272) 註集二家：曇鸞『往生論註』、道綽『安樂集』のこと。

(273) 曇鸞『往生論註』(浄全二・三六下)、道綽『安樂集』(浄全一・六八七上)。

ることを得んや。云何が在縁なる。彼の造罪の人は自ら妄想の心に依止して、煩惱虚妄の果報の衆生に依りて生じ、此の十念は無上信心に依止して、阿弥陀如来の方便莊嚴真実清淨の無量の功德名号に依りて生ず。三義を较量するに十念は重し。重き者先づ牽きて能く三有を出だす云。

夫れ前後殊なりと雖も、真妄重輕の義、惟れ同じ。智人準知せよ。請い問う。曰く、設い「輕重若等先作先受」の義に依りて之れを判ずと雖も、念仏の修善は先に在りて之れを勤め、犯重の諸罪は後に在りて之れを造れり。若し爾らば、豈に前念の功力に由りて淨刹の往生を得ざるべけんや一是。

又た、設い「業道如秤重者先牽」の文に依りて之れを許すと雖も、惡業惟れ軽く、念仏惟れ重し。豈に念仏の重業、順次往生の引業と成らざらんや二是。

又た、設い「輕重若等後作後受」の説に依りて之れを許すと雖も、此れは是れ、等業に約して以て語を為す。念仏は是れ重善、惡業は乃ち輕障、相い比して以て受業の先後を判断すべからざる

(274) 懐感『釈淨土群疑論』(淨土六・九四上)。

曇鸞『往生論註』(淨土一・三三六上)。

(276) (275) 出典不明。注(275)の対表現であると考えられる。

者なり
三。是。

抑^{そもそも} 五逆重しと雖も、無間一中劫の異熟果⁽²⁷⁷⁾を感ず。設い又た五劫を具足し、或いは又た八万大劫を経歴すと雖も、終に業尽の期有り。之れに依りて之れを言わば、縦い後惡滅善の義を論ずと雖も、八万大劫受苦の惡業と為得大利無上功德とに比対して、以て其の滅善の分齊を論ぜば、残る所の功德勝利は無量の恒沙も更に喩えとするに非ず。十方の微塵も全く類するに非ざる者をや。学者後惡に依りて永く前念の功力を失して、順生の巨益を得ずと謂うこと莫れ。

又た示して曰く、偏小權大と無く、円乘密実と無く、一切の善業等は全く後惡の為に消除せられざることを。若し後惡、先善を滅すと言わば、「一切智願猶在不失」⁽²⁷⁸⁾の明文、「麤心妙果・毫善不亡」⁽²⁷⁹⁾の誠談、如何が之れを會すべきや。但し華嚴遺教等の説に至りては、只だ是れ順次順後等の善果を遮抑して、後後永永に至らしむるに約して、以て語を為す。全く賴耶納收の善因を滅すと謂うには非ず。

(277) 異熟果：異熟因から生ずる果。未來世に果報を生ずる際、過去世や現世における因と異なる形で熟することを異熟という。

異熟の因を異熟因、果を異熟果という。

『法華經』（正藏九・二九上）。

(279) (278)

前半は源信『往生要集』（淨全二五・二四六下）、後半は湛然『法華文句記』（正藏三四・二四四下）からの引用か。

問うて曰く、善悪は是れ一雙の法なり。若し善に翻して之れを言わば、悪も亦た然ならん。

答えて曰く、此の難、不類なり。相い比すべからず。夫れ一切の善根、真実の地自り生じ、一切の悪因は虚妄の心従り出ず。真、妄に勝つは是れ順理なり。妄、真に負けるは亦た順義なり。一虚一実、比論するに足らず。故に始終俱に悪業は善に勝たず。初後同じく善事は悪を冤ゆゑすのみ。論家に所謂る感果の用は地前に之れを滅し、悪業の体は初地に之れを断ずという者なり。学者、善悪の二業相翻して以て更互たがいに消滅の義を論ずること勿れ。

難じて曰く、前難、猶お未だ遮せず。夫れ善悪の二業は是れ相翻の法なり。然るに「滅罪生善即得菩提」と言うは是れ一代の衆典通同の所説なり。之れを反して之れを言わば、必ず応に「滅善生惡墮在三途」の義有るべし。若し唯だ善には滅悪の功能のみ有り、悪には滅善の勢用無しと言わば、豈に善悪不齊の過を招かざるべけんや。如何。

答えて曰く、今先ず君に問わん。君、堅執して善悪相翻の義趣

を成せば、生得聞思の慧力を以ては悪業感果の勢力を断じ、修慧最上の徳能を以ては諸不善業の体性を断ずというが如し。

又た後の悪業を以て善根感報の功能、及お以よび衆善の体性を徐滅すること有りや、不や。

答えて曰く、我れ聞く、善根は悪業の勢力を滅し、及以び不善の体性を尽くすこと有れども、悪業は唯だ善趣感報の功能を滅するのみ。未だ善根の体性を消除すること有らず。是れ則ち真妄の不同有る所以なり。

又た四慧の有無に由りて爾り。

反詰して曰く、君、自ら「善悪二業感果参差しんし」の旨を存す。若し爾らば、何ぞ小子が善悪不齊の義を立つることを沮はむやと。時に執者緘唇かんしんして言わず。

小子、勝に乗じて云く、君、善根は悪の体用を断じ、罪業は善の功用を除くと成立するは、我れは一向に善根には並びに悪業の二を滅するの勝徳有り。悪業には唯だ善根の順次順後の感報の功力を遮抑して、後後未来、永永来際に至らしむるの功能のみ有り

(280) 出典不明。

(281) 緘唇：口を閉ざすこと。

て、更に互為消滅の義無しと存せり。

問うて曰く、衆典に皆な、断善闡提初めて悪願を發す時、一切の善根皆な永く断滅すと云えり。豈に是れ滅善生惡の義に非ずや。

答えて曰く、闡提、一切の善根を断除すとは此に過末の不同有り。所謂る若し過去の善に約して之れを言わば、闡提已後に善趣感果の勝用を遮障する。之れを滅善と名づく。若し未來に約して之れを言わば、惡願以後曾て善根を修せず。之れを断善と名づくるなり。「闡提断修善但有性善在」の高断、之れを思ふべし。又た闡提続善と言えり。若し都て先修の善業無くんば、何ぞ続善と云わんや。続善の語の顯す所、身中に猶お曾修の善根有りと聞きたり。抑闡提断善そもそもと言うは、譬えば破戒の者、未來の止持しぢ持の二相を廢して、過去運運の功德を失せざるが如し。智人思

察せよ。云云

難じて曰く、夫れ善惡の二法は是れ表裏相翻の法なり。若し爾らば、尤も互為滅除の義有るべし。然るに今頻りに匄つて、善惡

(282)

止持作持：止持とは、受けた戒体を保持して惡業を止めること。作持とは、受けた戒に従つて積極的に善業を修めること。

二法・滅不參差の旨を成立すること、太だはなは以て未審し。此れは是れ自由胸襟の浮詞を吐けるか。將た明鑑の道理文証有りや。如何。

答えて曰く、三五七九等の諸乗は皆な真如実相の大地従り生じて、還りて真如実相の大地に歸す。七支ぼく五逆等の衆惡は悉く妄想顛倒の因縁自り生じて、清淨法界の玉台に登らず。虚妄は眞善に勝たず、功德は惡業を撥却す。是れ則ち一虚一実・体用各別の意なり。所以に更互たがいに消滅の淺談を抛つて、一向不滅の深玄を存するなり。

難じて曰く、絆ことを無相不相の一法より一切功德の妙法を出生するの義に寄せて、善根不朽の旨を存立すること大いに然るべからず。夫れ『浄名』には「從無住来立一切法」と説き、『仁王』には「生得善生得惡」と宣ぶ。大都おおむね真如隨縁すとは、総じては一代洪經の誠説、別しては法華円宗の良談なり。若し之れに依りて之れを言わば、善惡の諸法皆な真如の大地自り出でて、亦た実相の陰坤に歸する者をや。若し爾らば、尤も相翻互滅の義を存すべし。如何。答えて曰く、此の難不類なり。夫れ善惡の二法は皆な真如一昧

(283) 七支：聖道を妨げる七遮のことか。

(284) 支謙訳『維摩詰經』（正藏一四・五二八中）。

(285) 鳩摩羅什訳『仁王般若波羅蜜經』（正藏八・八二八下）。

の広海自り流出すと雖も、其の体用悉く各別なり。故に十界依正、宛宛然たり。⁽²⁸⁶⁾ 四諦の善惡、歴歴然たり。善に清昇相資の徳有り、惡に滅離俯墜の能有りと言うは、大蔵衆典の通談、南北群英の定判なり。夫れ達池の四河を出だすや、四河豈に八徳有らんや。猛虎の豹猫を産するや、豹猫全く虎威無からんや。此れは是れ本支不似・親子不肖の謂いなり。又た黃鸝雛巢の中に一箇の郭公を見、赤帝童子の種より十善の漢高を生ず。⁽²⁸⁸⁾ 是れ亦た親子相い似ざるの義なり。三才未だ分かれざる則は、万物混然として一体なり。万物初めて離する則ば、軽く清めるは昇りて天と為り、重く濁れるは降りて地と為る。是れ亦た本末不同の意なり。此の例一に非ざれば、是こに於て尽し難し。学者自ら知れ。此れ等の文理に依りて、堅く真妄殊異・滅不參差の義趣を存するなり。高識の智人、商察せよ。

抑、今、白道恒存の明文に依りて、等起不變の道理に任せて之れを推するに、後惡前念を滅して永く往生の大利を失すということと甚だ穩便ならず。今二師増減の過失を挫折して、以て持名功德

(286) 宛宛然…宛然とは、そっくりそのままであるさま。宛を重ねることで強調の意を示したものと思われる。後続の「歴歴然」も同じ用法。

(287) 達池：阿耨達池のこと。ヒマラヤ山脈の北にあるとする想像上の池で、金銀や寶石が岸を形成し、竜王が住む。その池から流れる水は澄んで冷たく、ガンジス川などの四大河となって世界を潤しているとされる。

(288) 赤帝童子…十善漢高：劉邦の出生の逸話。

の勝用を顕示せり。伏して請う、有眼の士、眼を此所に著けよ。仰ぎ願わくは高識の人、指を此所に染めよ。曰く敢えて之れを問う。曰く、父師光公大徳高論の意の云く、

或る人欲すらく、前念の功力曾て後悪の為に消除せられず云。行者等若し深く此の一解に住せば、定んで悪無礙の邪念を生ぜん。若し爾らば、大いに七仏の通誠に違反し、尤も一代の衆典に乖角けかくする者なり。所以に彼の偏執の一見を制伏せんが為に、且く抑止諸罪門の意に就きて、以て不得往生の判を為す。其の実は大いに夫の一類学者の永滅不生の義に異なり云。

若し学者等、深く韓獹かんろうの痴念を起さば、定んで管見少量の執弊を破りて、以て光公大智の破文を信ぜんのみ。

問うて曰く、已に等起不変・得繩不斷、万に一失無しということを聞く。此れは是れ連持修行の人に就いて、以て語を為すか。但だし発得する所の三心に於て傾動退失の義有らんや。

答えて曰く、黒谷一流分かれて両派291と為る。

(289) 出典不明。聖光の意をまとめたものとみられる。

(290) 韓獹：中国の春秋戦国時代、韓の国にいたとされる俊足の賢い犬の名。名犬の代名詞。

(291) 派：原文では派だが、派に訂正した。

所謂る一伝に曰く、三心一たび発れば永く退失無し。何故ぞ爾か存するや。謂く、五箇の文理有り。故に爾く云うのみ。曰く、「若く不生者」の願力に執持せらるるが故に^一。仏力加被して衆聖護念するが故に^二。「念仏衆生摂取不捨」と説くが故に^三。「蒙光触者心不退」と判ずるが故に^四。天魔に擾乱せられざるが故に^五。此れ等の文理を援拠として以て三心不退の義を成立す^云。

一伝に曰く、三心発得の行人、万進一退すと。其の義、上の文理の如し。

請い問う。曰く。夫れ十信・十住・名字・観行、猶お所得を退失す。何に矧や底極^{いんごく}下^{した}の凡夫の心行に於てをや。但だし自力の難行は十進九退なり。他力の修念は千進一退なり。如何が一退なる。所謂る邪地異生の修行なるが故に。悵惜^{りんしやく}身財退、憍慢貢高退、異学異見退、自造大罪退、自然緩漫退、造次世務退、長病羸瘦退、惡境妨礙退等の種種の退失有り。故に万進一退と曰う^云。夫れ從上の二義、上古にも之れを確執し、今來も之れを諍論して、是非決し叵し。但だ雞足狼跡の靈崛に入りて、正しく童華慈尊の高

(292) 擾乱：入り乱れ騒ぐこと。

(293) 十信・十住・名字・観行：十信と十住は、菩薩修道における五十二の階梯のうち初期の二十位までを指す。名字と観行は、天台宗所説の修行の階位である六即のうち第二と第三の名前である。ちなみに名字即とは、經典や論書に依って一切はみな仏であり、自身も本来は仏であることを言葉の上で了解する位。観行即とは、円頓の教えを受けて教え通りに正しく修行する位。

(294) 邪地異生：五濁惡世の娑婆世界に住む凡夫の意。

(295) 雞足狼跡：マガダ国にある山のこと、鶏足洞がある。狼跡山ともいう。釈尊の下で悟りを開き、衆生のために行う三度の法の会のこと。

(296) 童華慈尊：弥勒が下生し、童華樹の下で悟りを開き、衆生のために行う三度の法の会のこと。

断を俟つのみ。

尋ねて曰く、善峯の上人は三心不退の義を立て、鎮西の大徳は万進一退の旨を存す。抑此れ等の二哲は、祖師上人の双眼、然公和尚の両足なり。善公も聖大徳の上に居り難きか。聖公も善大徳の下に立ち回きか。原流弁じ回きこと池水の湛えたるに似たり。嗣傍決し難きこと、環の端無きが如し。然るに今、胡ぞ両賢の所存大いに銚楯乖角するや。

答えて曰く、此の義、今に適たるに非ず。夫れ翫多五人の門葉、律蔵を五部に諍い、玄奘八九の神弟、法義を多端に論ずるのみ。

且く從義の『補註』に云く、

翫多の五弟子等とは具には優波翫多と云う。『西域記』に云く「烏波翫多」、此こには近護と翻ず。翫は渠竹の切なり。

五弟子とは、仏滅度後一百余年に育王、会を設く。上座、他鞞羅義を立つ。摩訶僧祇・大衆、不同にして分かれて二部と為る。後に上座部より更に二部を生ず。謂く雪山と薩婆

(297) 善峯上人：西山善峯寺に住した証空上人のこと。

(298) 鎮西大徳：九州鎮西で活動した聖光上人のこと。

(299) 翫多五人門葉：釈尊滅後に仏法を伝えた五人の師。迦葉・阿難・末田地・商那和修・優婆翫多のこと。

(300) 從義：一〇四二〜一〇九一年。中国宋代の天台山外派僧侶。

(301) 從義『法華三大部補註』（中統蔵二八一九〇上）。

(302) 他鞞羅：sharivāṣṭīの音写。上座部仏教のこと。

多となり。雪山絶えて後、薩婆多、更に僧祇を習うて三部を生ず。謂く弥沙塞と曇無徳と迦葉遺と及び薩婆多と僧祇とを五部と為す。『大集経』の中に預め五部を指し、『宗輪論』の中に広く分別して説けり^{上巳}。

又た五大院の『教時諍論』に云く、^四

大唐の貞観に玄奘法師天竺国に往きて、正法蔵に詣ずること一十七年、彼に在りて学習すること一十六年、此に於て翻訳の門人三千、入室四人あり。玄奘、十師の檀越玄感居士に相い逢いて百卷の釈を得たり。基、其の百卷を糅して折りて十卷を得たり。十支の大論、以て扶疎と為す。基の子慧沼、沼の子智周、其の門に相伝して、先ず其の道を揚ぐ。三蔵の門人、義寂法師は『義林章』一十二卷を作りて、以て基師の『法苑林章』を破す。遁倫法師は『瑜伽疏』を作りて所立の義理多く基の義に違せり。玄隆、円弘、神肪、泰賢、並びに章疏を作りて、共に三蔵の旨を受けたりと称すれども、而も多く基師の義に違背せり^{上巳}。

(303) 五大院：五大院安然（八四一〜九一五年）。
比叡山で活躍した天台の僧。

(304) 安然『教時諍論』（正蔵七五・三六五下）。

又た法宝、『俱舍』を解するに多くは普光を破し、慈恩、『唯識』を判ずるに、多く西明を挫く等、此れ其の例なり。彼に準じて之れを思うに何の不可か有らん。夫れおもんみ以れば聖善両哲且く退不の義を諍論すと雖も、津梁たがは一揆にして、大道は爽たがうこと無し。是れ則ち金杖を折るに金体殊なること無く、皮衣を争いて衣体破れざるの謂いなり。行者等、指を忘れて月を見、筏を捨てて岸に著き、以て尊号を持念して淨刹に往生せよ。

問うて曰く、且く一義に就いて問うて曰く、三心退失の行者は幾いくばくの生を経てか還發往生の巨益を得るや。

答えて曰く、普賢の行人禪法の修者に準擬して之れを言わば、三生を出でずして必ず往生することを得。或は過ぐる者も有り云云。

又た問うて曰く、三心退失の過失に由りて、一生雜染世界に住すと言うは、生じて何処にか在る。

答えて曰く、古来の碩徳皆な曰く、(306)

三心連持の行者は、設い客塵業障有りと雖も、他力の加持を

(305) 津梁：橋渡し。転じて仏教のこと。
(306) 出典不明。

被りて必ず西方に往く。若し心行を退失すれば、則ち只だ先業の善惡に隨いて六道の巷衢こうくに昇沈す。但し善趣の生を受くることは爪上の土の如く、人間の報を得ることは海針を貫くに似たり。故に人天に受生するの類は鱗角よりも稀にして、

三途に墮在するの輩は牛毛よりも多からん云云。

今謂く、此の解、然らず。原ぬるに夫れ持念名号の行者は、其の罪障を論ずれば鵝鴨がおうの表毛よりも軽く、厥その善根を謂えば恒沙塵数よりも多し。然る所以は『大般涅槃』及び『大集方等』に依りて之れを觀れば、念仏の行人は無量僧祇の善根を具し、爾許そこばく恒沙の功德を備えたり。夫れ惟度おもんみれば、阿頼耶藏識の中に善惡の二業を含収せり。然るに人天有漏の小果を感ずることは、僅かに是れ五戒十善、分座聽經等の微善の感ずる所なり。且く「業道經業道如秤重者先牽」の説に依りて子細に点檢するに、当に是れ頼耶藏内の罪業は五戒十善の小功をも妨障せざる輕薄の微惡なるべし。只だ過去汎爾の善惡に約して以て、其の感果の優劣を詳判するすら、猶お以て横に四惡趣を截り、惡趣自然に閉じて、人天

の善門任運に之れ開くべき道理必然なり。何に矧んや現世に於て、一念弥陀仏即滅無量罪の大善を勤むるに、豈に蔵識所収の微悪を滅却せざるべけんや。之れを以て之れを觀れば、持名の行人は是れ一向清淨の善人にして、全く毫芒の惡業も有るべからざる者なり。之れを以て之れを言えば、設い心行の退失に由りて上生せずと雖も、安養の宝刹に且らく人天の善果を受けて無窮の快樂に誇らんこと必せり。

抑おほそも 又た縦い過去残余の微惡、及及び退心已後の罪障有りと雖も、曾修河沙の善根と現行名号の功德とを比対して其の多少を論ずれば、更に比及するに足らず。若し重者先牽の道理有らば、豈に惡道の生を絶ちて善趣の果を得ざらんや。彼と云い此と云い、念仏退轉の人は应当に善趣の生に安養の生を継ぎ、快樂の報に安養の報を續くべし。

難じて曰く、夫れ大通結縁の徒、名字觀行円位を退して、或いは闡提謗法の邪類と為り、或いは五逆犯重の惡人と為る。是れ豈に円人惡趣に墮在するに非ずや。但し「即往人天不墮惡趣」等の

説に至りては、此れは是れ多分に約して以て語を為す。学者偏存すること勿れ。若し此れ等の文理に準じて之れを言わば、三心退失の人は多分は人天に生じ、少分は四趣に墮せるか。如何。

答えて曰く、此の難不類なり。彼は自力有上の疎行なり。此は他力無上の妙善なり。比論するに足らず。矧んや又た彼は塵劫流転して悪業增多なれば、業権重きに由りて四悪の楚毒を吞むをや。此は一生泥滞して善根甚だ無量なり。善権重きに由りて三趣の快樂に誇るか。智人商量せよ。智人商量せよ。

曰く敢えて問う。曰く、此は是れ父師意密の一説ならん。何んの言ぞや。曰く、且く退心種姓の人類軟弱の人を怖れしめんと欲して、一往仮に退心順次受報不定の一説を設けたるのみ。其れ実には然らず。唯だ人天善趣の妙果を受けたるのみ。若し直に父師の文言のみを取りて未だ光公の密意を会せずんば、則ち大いに像法決疑の誠諦に背かん。如何が背く。謂く文に曰く「文の如く義を取るは三世諸仏の怨なり」⁽³⁰⁷⁾と。若し直に父師の言のみを取らば、是れ父師の怨なり。若し学者等、赴機の筌蹄⁽³⁰⁸⁾を忘れて内証の魚

(307) 円宗『一乘仏性慧日抄』(正蔵七〇・二八一)中。

(308) 筌蹄：魚を捕らえるうえと、兔を捕獲する畏。

免を存せば、是れ師資口受の高弟か。亦た言外領意の神足か。南山大師の『歸敬儀』に云く、⁽³⁰⁹⁾

經教に心を引く、意遠きを懐おもうことを存す。其の大致を取るべし。未だ文を專にすべからず。故に『經』に云く、千章を誦すと雖も義あらずんば何んの益があらん。是に知んぬ。深く所以有ることを。熙きなるかな。何んの未だ其の致を悉あきらめざる。致は指に為よる。月を得て指おのずか自ら忘す。俗流常に詠じて意を得て言を忘れよという。豈に道門を意として猶お封滯を行ぜんや上。已。

大都經教に方便隨他の説有り。論藏に影略互頭の文有り。解釈に教文実義の殊ことわり有り。明師に口伝筆授の重き有り。今述する所は、皆な是れ口決の実義にして、愚案の私建に非ず。学者怪しむこと勿れ。

夫れ上来、若干の理を尽くし、爾許そこの文を尽くす。設い生盲と雖も誰か之れを見ざらんや。設い生聾と雖も孰れか之れを聞かざらんや。若し学者有りて直に上の三个の良談を見聞することを得

て、即時に理に会し文を悟らば、此れは是れ快馬の鞭影を見て即ち正路に趣くが如き者なり。夫れ設い卅里を過ぐるも、若し上来の三義を曉らば、是れ亦た智人の列ならん。若し終に文意を看取することを得ること能わずんば、只だ是れ古昔の瞽腹(310)にして亦た即ち中古の宋人ならん。上の兩輩の得失、同年にして之れを語るべからざるのみ。学者恥慙せよ。学者恥慙せよ。

そもそも抑 従上三科の来意は何に意ぞや。此れは是れ正しく庸才兔馬の浅見を挫いて、以て先師香象の深意を顕すなり。智人省察せよ。智人省察せよ。

責めて曰く、上来所破の三義は、皆な是れ上古賢哲の所立にして、今代童象の所伝なり。然るに今恣に之れを挫折するは、豈に是れ賢を欺き聖を誣そしるに非ずや。誹法謗人の過よが、焉ぞ脱るることを得ん。如何。

答えて曰く、夫れ荆岳の石、豈に皆な是れ玉璧ならんや。梨山の木、未だ必ずしも悉く梅檀にあらず。外書に云わざるや(311)。智者も千慮に一失有り、愚者も千慮に一得有りと。後進怪しむこと

(310) 瞽腹：物の道理の分からないこと。
宗曉『四明尊者教行録』（正藏四六・八九四）
中。

(311) 外書：『四明尊者教行録』（正藏四六・八九四）
中。

莫れ。来者疑うこと莫れ。傍論是れ繁し。学者厭怠すること勿れ。
於語語其の価直皆な是れ万金なり。声声厥の功德悉く即ち引業
なり。智人思焉せよ。

抑別意弘願の名号を勤修するの人は皆な決定即詣の數に墮在
して速やかに二尊諸仏の衛りを感じ得す。孰れの行者か熙怡逍遙
せざらん者をや。嗚呼喜悅ばしきかな。中央の覺王、五相瑜伽
の大法を暢べ、樹下の三尊、一乘円頓の上衍を示したまうを見ん
こと近きに在り。白鷺黄離、常樂我淨の四徳を説き、鳳鸞鴻鶴、
苦空非我の要法を囀るを聞かんこと幾ばくにも匪ず。尤も勤修を
致すべし。寔に応に頭然を救うべし。嗚呼草露幾ばくも無きの身、
夙夜に尊号を唱え、石火暫く有つの命、晨昏に淨利を欣う。称名
の声発し易く、欣求の誠淺からず。古人言えること有り。

日影待ち難し朝露の命 人闌け我れ老いたり白霜の眉

目前に咲いを催す有為の閣 門下に悲しみを増す生死の岐

山葉風に随いて麓に停まること無く 林華錦を敷く皆な夢の

如し

(312) 熙怡逍遙：喜び樂しむこと。

(313) 五相瑜伽：通達菩提心・修菩提心・成金剛心・証金剛心・仏身円滿の五相を成就して、金剛界大日如来を体得すること。

(314) 頭注に作者不明とある。また、第六句が欠落しているところある。

夕舞朝歌して時を過すこと莫れ

『大般涅槃經』に云く、⁽³¹⁵⁾

是れ壽命を觀ずるに、常に無常の怨讐の為に遶^{まじわ}るる。念念損滅して增長有ること無し。牛羊を牽きて屠所に詣たるが如しと。

『般涅槃經』に云く、⁽³¹⁶⁾

若し衆生有りて但だ名を聞くに、十二億の生死の罪を除却す。若し名を受持すること有る者は、設い重障有れども地獄に墮せずして、淨妙の淨土に生ずと。

『上生經』に云く、⁽³¹⁷⁾

若し但だ名を聞く者は、黒闇処に墮せず。一たび名を称する者は、千二百劫の生死の罪を除却す^上と。

南無阿弥陀仏

淨土十勝箋節論卷上

乾中終

(315) 『涅槃經』(正藏一・二・五八九下、正藏一・二・八三七中)。

(316) 『仏說文殊支利般涅槃經』(正藏一・四・四八一中)。

(317) 『觀弥勒菩薩上生兜率天經』(正藏一・四・四二〇中)。